明日の学校をともに考えるベネッセの教育情報誌

全国の校長先生に無料で年4回お届けしています

VIEW21

ビュー21
2013
Vol.2
中学版

特集

生徒の心に火をつける

学校事例 宮城県名取市立増田中学校／福井県永平寺町永平寺中学校
東京都世田谷区立太子堂中学校／三重県四日市市立楠中学校

コラム ハタモク代表 **與良昌浩**／川崎フロンターレ **川口良輔**

インタビュー 上越教育大教授 **中山勘次郎**

私を育てた あの時代、あの出会い
生徒を、学校を元気にする術をその言葉と行動に学んだ
愛知県岡崎市立翔南中学校校長 **加藤政幸**

Benesse発 これからの教育
小中の綿密な連携で育む英語コミュニケーション能力 岐阜県多治見市立笠原中学校

ミドルリーダーの挑戦 ―前へ! 前へ!!
皆で授業を改善していく文化を私を育ててくれたこの地に根付かせたい
佐賀県吉野ヶ里町立三田川中学校 **吉田喜美子**

ベネッセ教育総合研究所 http://berd.benesse.jp

C O N T E N T S

VIEW21

［びゅーにじゅういち］

2013

Vol.2

中学版

特集

3 **生徒の心に火をつける**

4 課題整理 **主体的に学びに向かいにくい今の中学生の心に火をつけるには？**

6 学校事例1 **誰もが自分を表現できる学校風土が生徒を伸ばす**
宮城県名取市立増田中学校

11 学校事例2 **認められる経験を通じて培う自尊感情がやる気を生み出す**
福井県永平寺町永平寺中学校

16 学校事例3 **個に応じた見取りと指導で生徒の背中を押す**
東京都世田谷区立太子堂中学校

20 学校事例4 **生徒の新たな面を見付けて褒め、生徒自ら設定した上限を取り払う**
三重県四日市市立楠中学校

24 **私たちが実践する子どもの心への火のつけ方** ── ハタモク代表・與良昌浩さん、川崎フロンターレ・川口良輔さん

26 インタビュー **段階を踏みながら生徒を自発的な学びに向かわせる**
上越教育大教授 **中山勘次郎**

連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い
生徒を、学校を元気にする術をその言葉と行動に学んだ
愛知県岡崎市立翔南中学校校長◎**加藤政幸**

28 Benesse発　これからの教育
小中の綿密な連携で育む英語コミュニケーション能力
岐阜県多治見市立笠原中学校

30 ミドルリーダーの挑戦 ──前へ！前へ!!
皆で授業を改善していく文化を、私を育ててくれたこの地に根付かせたい
佐賀県吉野ヶ里町立三田川中学校◎**吉田喜美子**

32 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

http://berd.benesse.jp　本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

ベネッセ教育総合研究所 発足のごあいさつ

このたび、加速し複雑化する“子育て・教育環境の変化”に迅速かつ総合的に対応し、一層の社会貢献を果たす目的の下、株式会社ベネッセコーポレーションの研究機関である「ベネッセ教育研究開発センター」「ベネッセ次世代育成研究所」「ベネッセ高等教育研究所」「ベネッセ食育研究所」の研究機能を、「ベネッセ教育総合研究所」に統合する運びとなりました。

今後も、「子どもたちの未来」と子育て、教育のあるべき姿を模索し、社会に貢献できる民間の教育研究機関を目指して活動してまいります。引き続き、ご指導ご鞭撻のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

2013年8月吉日

ベネッセ教育総合研究所所長 谷山和成

ベネッセ教育総合研究所
http://berd.benesse.jp

次世代育成研究室	妊娠・出産、子育て、保育・幼児教育領域
初等中等教育研究室	小学校・中学校・高等学校領域
高等教育研究室	大学領域
グローバル教育研究室	デジタル、英語領域
情報編集室	情報誌、WEBサイト運営

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

私を育てた
あの時代、あの出会い
第14回

生徒を、学校を元気にする術を その言葉と行動に学んだ

愛知県　岡崎市立翔南中学校校長　加藤政幸 KATO MASAYUKI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、加藤校長が語る。

かとう・まさゆき　専門教科は数学。岡崎市立北中学校赴任後、岡崎市小中学校教職員組合執行委員長を2年間務める。赴任先の各校で野球部の顧問を務め、翔南中学校でも顧問に名を連ねる。

- 1979（昭和54）
  岡崎市立竜海中学校に新採で赴任。大久保慎一先生と出会う
- 1987（昭和62）
  岡崎市立岩津中学校に赴任
- 1993（平成5）
  岡崎市立矢作北中学校に赴任
- 1999（平成11）
  岡崎市立北中学校に赴任。校務主任を務める。同年、大久保先生も校長として赴任

北中学校での日々や、大久保先生の「校長メモ」をそれぞれ冊子にまとめた

- 2004（平成16）
  岡崎市立矢作中学校に教頭として赴任
- 2008（平成20）
  岡崎市立城南小学校に教頭として赴任。翌年、校長に昇任
- 2011（平成23）
  愛知県教育委員会西三河教育事務所に勤務
- 2013（平成25）
  新設校の岡崎市立翔南中学校に初代校長として赴任

生徒が自分をどう思っているかそれを知ることが生徒理解

私は大久保慎一先生と2度、同じ学校に勤務し、先生から教師としての全てを教わりました。

初めての出会いは私の初任校です。大久保先生は体育、私は数学と担当教科は違いましたが、当時32歳の大久保先生は、同じ年に赴任した新米教師を気に掛けてくれたのでしょう。他の先生も交えてよく飲みに連れて行ってくれました。店は必ず学区内。「教師が学区内で物を買い、食べて飲むことで地域とのつながりが深まり、学校を応援してくれるようになる」という考えからです。そして、店で、授業の考え方、部活動の意味などさまざまな話をしてくれました。

中でも学んだのは、生徒と向き合う姿勢です。先生は礼儀や態度にとても厳しかったのですが、生徒から厚い信頼がありました。気になることがあればすぐに家庭訪問をし、生徒をちょっと連れ出してじっくり話をする。自分の給食の配膳は学級内で疎まれているような生徒に1年間任せ、部活動ではレギュラー以外の生徒ほどよく声を掛けていました。

私が生徒指導で悩んでいると、先

生はこう言いました。「生徒を外から見てどういう子かを判断するのではなく、生徒が自分自身をどのように思っているのかを、教師が分かっていることが真の生徒理解だ」。

生徒の見えない部分をどうすれば理解できるのか。私は生徒の生活ノートを毎日読み、生徒が2ページ書いてきたら、私も同じ分、赤ペンで思いを書きました。自分が心を開かなければ生徒も心を開かないと思い、学級通信に自分の中学時代を綴りました。そうすることで生徒を本当に理解できたかどうかは分かりません。でも、生活ノートが年3、4冊に上るほどやりとりをした生徒がいたのは、そうした努力を感じてくれたからだと思うのです。

毎日の「校長メモ」に指針と勇気をもらった

2度目の出会いは、大久保先生が校長、私が校務主任としてやはり同じ年に赴任した学校です。いわゆる荒れの状態にあり、立て直しのため教職員が半数入れ替わった年でした。

第1回の職員会で、大久保先生は「やりましょう。やってください。全ての責任は私が取ります」「これだけの仲間が集まって、出来ないことはない。出来ないのは相手が強いからではなく、私たちの努力が足りないと思いましょう」と言われました。その言葉に職員室の空気は明らかに変わりました。そして、先生は自ら行動で示されました。その1つは文化祭でのソーランです。生徒に学校への誇りを持たせたいと提案。自ら先進校を視察し、専門家を講師に招きました。生徒は少しずつ真剣に取り組むようになり、ついには地元の祭りにも参加。地域の人々から温かい拍手をいただいたのです。

また、大久保先生は学校での出来事を通して、教育の本質、心構え、あるべき教師像を厳しく、時にユーモアを交えて伝える「校長メモ」を毎日配られました。それを読み、実践することは日々の研修となりました。メモは先生方の努力が認められる場でもありました。大久保先生は朝6時に学校に来て、掃除をしながら校内を点検されていましたが、腰を痛めたため、私が一緒に回ることにしました。そのことを「2人で学校のことを話しながら回っていると、自然と勇気が出る。同志というものだろう」と記されたのです。

「学校が一枚岩になることが大切だ」とよく言いますが、この時まさに全教職員が校長を中心に1つとなり、生徒と向き合っていたのです。

私は今年、新設校の初代校長に着任しました。生徒が喜んで来てくれる学校、先生が働きたくなる学校、地域の人から応援される学校にすることが目標です。開校式ではうれしいことがありました。「来校者は皆、校舎や校庭をすごいと褒めてくれます。いつか中身を褒められるようにしたいですね」と言うと、生徒は大きな声で「はい」と返事をしてくれたのです。頼もしく感じました。そして、私も教職員の初顔合わせの日から毎日、「校長つうしん」を配付しています。「通信」と「通心」の意味を込めて「つうしん」としました。1年間で全教職員を登場させるつもりです。生徒と直接向き合うのは現場の先生方です。その先生の成長を支えるのが私の役目と心得、新しい学校づくりに邁進していきます。

「生徒を知ろうとする教師の努力を生徒は感じ取り、心を開く」

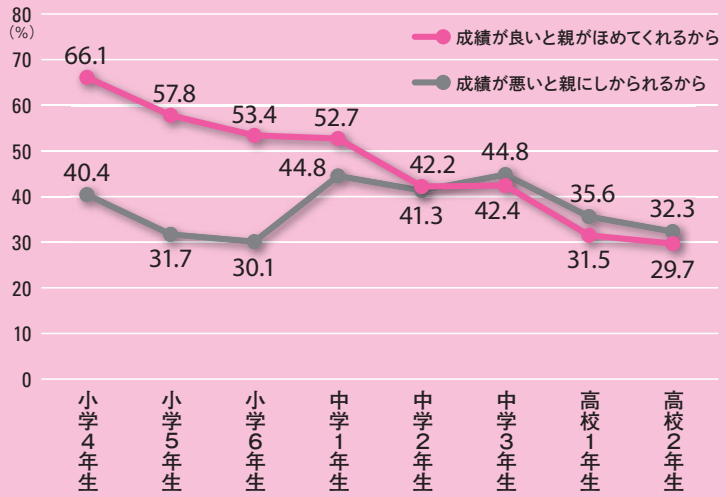
特集

生徒の心に火をつける

生徒が主体的に前に進んでいけるようにするために、
教師は生徒にどうかかわっていけばよいのだろうか。
生徒の心についた火が燃え続けるために、
教師に出来ることはどのようなことか。
今号は、教師が常に考え続けているこの問いに、
正面から向き合いたい。

「ほめられるから」勉強する子どもは減少
中学生で「しかられるから」勉強する子どもが増加

Q.あなたが勉強しているのは、どうしてですか



＊「とてもそう」＋「まあそう」の%
出典／ベネッセ教育総合研究所「第2回子ども生活実態基本調査」（2009年）

中学校時代の先生の思い出

「高校生未来プロジェクト」＊に
参加した高校生の声より

◎中学生の頃の私は、くよくよ悩むタイプで何事においても自信がありませんでした。そんな私に「焦る必要はない。失敗を恐れることはない。失敗してもいいから前向きに取り組みなさい」と声を掛けてくださいました。その言葉を聞いて、何だかふっと気持ちが軽くなりました。今、いろいろなことに積極的に行動できるのも、この先生と出会ったからだと思っています。

＊学びの意欲の研究として実施した高校生による
ワークショップ
http://benesse.jp/berd/hirakemirai/

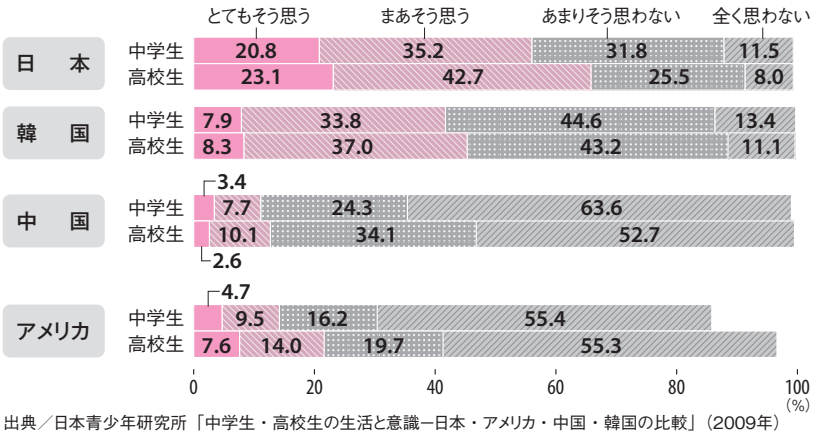
主体的に学びに向かいにくい今の中学生の心に火をつけるには？

生徒が主体的になれない要因をデータから探ると共に、P.6から紹介する学校事例を基に、生徒の心に火をつけるポイントをまとめた。

データに見る中学生の意識

図1 諸外国に比べて、自信のない日本の中高生

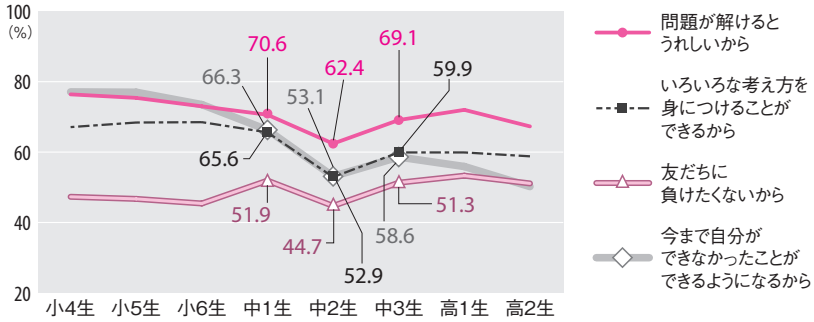
Q. 自分はダメな人間だと思いますか



出典／日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識―日本・アメリカ・中国・韓国の比較」（2009年）

図2 学習に前向きな動機を見い出す生徒が中２で減少

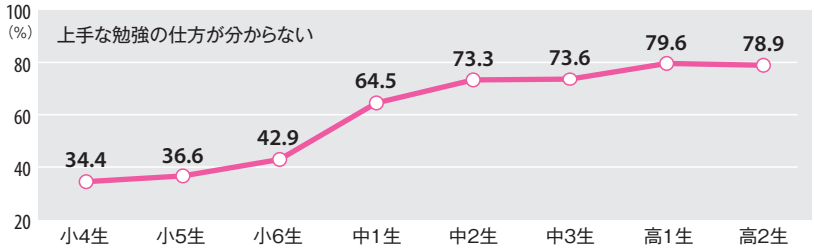
Q. あなたが勉強しているのはどうしてですか



＊「とてもそう」+「まあそう」の%

図3 上手な勉強の仕方が分からなくなる中学校進学時

Q. 次の項目に当てはまりますか



＊「とてもそう」+「まあそう」の%

図2・図3出典／ベネッセ教育総合研究所「第2回子ども生活実態基本調査」（2009年）

調査結果を見ると、中学生が学びに向かいにくい実態が浮かび上がる。まず、日本の中高生の自己肯定感は、海外の中高生と比較して低い（図１）。また、学習に対する前向きな気持ちが中学校時代に低下することがうかがえる（図２）。更に、中学生になると、勉強の仕方が分からないと感じる生徒が急増する（図３）。中学校時代に自己肯定感を高めたり、勉強の仕方が分かったりすると、生徒は主体的に学びに向かうかもしれない。

生徒の心に火をつける

課題解決の糸口

生徒の心に火をつけるために、学校と教師はどうかかわるか

自己肯定感を持たせる

生徒一人ひとりの誕生日に「おめでとう」と言う ▶P.11
福井県永平寺町永平寺中学校　宮下洋一校長

間違えるのは当たり前という意識を浸透させる ▶P.12
福井県永平寺町永平寺中学校　竹内文江先生

大勢の先生がいつも見てくれているという安心感 ▶P.22
三重県四日市市立楠中学校　井上弘之先生

自信を付けさせる

みんなの前で活躍する「デビュー」の機会をつくる ▶P.8
宮城県名取市立増田中学校　川口哲央先生

リーダーとして責任を持たせ、一人前として扱う ▶P.13
福井県永平寺町永平寺中学校　田上由美先生

生徒自身が頑張ったと思うことを認め、具体的に褒める ▶P.20
三重県四日市市立楠中学校　佐藤正倫校長

目標を持つ意義を伝える

教師自身が妥協せず、高い目標を持ち続ける ▶P.9
宮城県名取市立増田中学校　大森浩美先生

授業の魅力や活動の意義を熱く語る ▶P.16
東京都世田谷区立太子堂中学校　冨士道正尋校長

方法を明確に示す

結果だけでなく、各生徒の努力のプロセスを大切にする ▶P.18
東京都世田谷区立太子堂中学校　宍戸弘子先生

生徒個々の学習のつまずきに丁寧に対応する ▶P.22
三重県四日市市立楠中学校　上原啓江先生

トライ＆エラーを繰り返し、自分で考える機会を与える ▶P.25
株式会社川崎フロンターレ　川口良輔さん

知りたい意欲を引き出す

授業の中で生徒オリジナルのものを引き出し、生徒同士で共有し合う ▶P.6
宮城県名取市立増田中学校　佐藤俊隆校長

最後に発展的な内容を話し、余韻を残して授業を終える ▶P.17
東京都世田谷区立太子堂中学校　加藤清春先生

模範解答のない問題と向き合うことの楽しさを体感させる ▶P.24
ハタモク代表　與良昌浩さん

編集部から

今号では、教師一人ひとりが生徒とどう向き合っているかを丁寧に取材し、紹介しています。

「自己肯定感」を育み、「自信」を持たせることは、生徒が前向きに行動するための土台となるという考えは、どの先生も大切にされていました。その上で、目標を持ち、目的や意義を伝え、具体的な手順を丁寧に示すことで、生徒の意欲を引き出そうとしていることも分かりました。例えば、「失敗」はキーワードの1つ。永平寺町永平寺中学校の竹内文江先生が語るように「失敗しても大丈夫」と思える環境をつくることが前提となりますが、生徒はトライ＆エラーを繰り返すことによって、新たな目標を見付け、更に、前に進もうという意識を強めていくのでしょう。

学校現場には、学びだけでなく、生徒が前向きに取り組めるためのさまざまな工夫があります。正解はもちろん1つではありません。次ページ以降に紹介した先生方の実践を、読者の先生方それぞれが解決策を探る糸口として参考にしていただければと思います。

ベネッセ教育総合研究所
情報編集室室長　小泉和義

学校事例 1

誰もが自分を表現できる学校風土が生徒を伸ばす

宮城県 名取市立増田中学校

2011年の東日本大震災で生徒の多くが被災した名取市立増田中学校。「生徒の意欲を引き出すには、学校が安心して自分を表現できる場所でなければいけない」と佐藤俊隆校長は言う。教師はどのように生徒と向き合い、活躍の場を与えているのか。

私と生徒とのかかわり方

学校を生徒が自信を持って自分を表現できる場に

佐藤俊隆 校長

「5つの場」を大切にし生徒の自己実現を支援する

生徒のやる気を引き出すための一番のポイントは、自己肯定感を高めることだと考えています。今の子どもは総じて自分に対する評価が低いようですが、私は子どもの能力が低いとは決して思いません。一人ひとりの生徒の持ち味を適切に評価し、その頑張りを教師がきちんと認める。生徒自身が「自分の考えを表現していいんだ」「自分は出来る」と思えるような学校をつくることが何よりも大切です。

どの生徒にも得意、不得意があります。授業で力を発揮できる生徒もいれば、部活動の中心選手として欠かせない存在だったり、行事の盛り上げ役として周囲から一目置かれる存在だったり、一人ひとりさまざまな個性を持っています。生徒それぞれが自分の良さに自信を持ち、学校が安心して過ごせる居場所となるために、「授業」「学年・学級づくり」「生徒会活動」「学校行事」「部活動」の「5つの場」の大切さを、教職員全員で共通理解を図りながら、教育活動に取り組んでいます。

その活動を後押しするために、私が取り組んでいるのは学校便りの発行です。生徒の取り組みや活躍の様子を、時を置かずに紹介することによって、感動や感激を生徒や保護者と共有し、同じ方向を向いて次の一歩を踏み出したいと考えているからです。

本校のある名取市は、東日本大震災の被災

School Data

◎1947（昭和22）年開校。「一人ひとりが光り輝く学校」を教育目標に掲げ、自分から考え、表現し、活動できる生徒の育成を目指す。部活動が盛んで、県中総体や東北大会に多数の部活動が出場している。

校長◎ 佐藤俊隆先生

生徒数◎ 533人　学級数◎ 17学級（うち特別支援学級2）

所在地◎ 〒981-1224　宮城県名取市増田字柳田230

TEL◎ 022-384-2329

URL◎ http://academic4.plala.or.jp/masu-jhs/

公開研究会◎ 未定

生徒の心に火をつける

地で、本校周辺にも500メートル手前まで津波が押し寄せ、3人の生徒が亡くなりました。被災して転入してきた生徒は29人、仮設住宅に住む生徒は約35人、今も約100人が支援を受けています。全校生徒は533人ですので、5人に1人はいまだに震災の影響を受けていることになります。

家庭では大変なことがたくさんあると思いますが、そうした状況でも生徒はけなげに頑張っています。2012年度に、本校の陸上部が初めて県の駅伝大会で男女共に入賞を果たすなど、生徒の努力がようやく報われつつあります。そうした頑張っている姿をいち早く学校便りで伝えることによって、少しでも生徒の励みになればよいと考えています。

英作文を生徒間で共有し認め合う学級風土を醸成

生徒の居場所づくりは、教科指導でも出来ると思います。私は担任時代、担当の英語で、定期考査の2週間前に毎回自由英作文を宿題に出していました。生徒に提出させた英作文を、私が添削してから返却し、定期考査で同じ内容を書く問題を出すのです。テーマは、「生きるってどんなこと？　幸せってどんなこと？」など、生徒の生活や体験を基に書くものとしていました。

生徒が定期考査で書いた英作文は、1行であっても全員分をプリントにまとめ、試験後に答案と一緒に配り、学年内で共有しました。生徒は友だちが何を書いているのか気になり、配られると英作文を必死になって読みます。

私は架空の人物の作り話や遠い世界の話はしたくありません。生徒のオリジナルなものを引き出して互いに共有しなければ、コミュニケーションの手段としての英語を学ぶ意味はないはずです。どんなに英語が出来ない生徒でも、言いたいことや書きたいことはあります。書いたものを共有することによって、生徒に英語を読む必然性を与えると共に、「自分を表現していいんだ」という気持ちを育むことができると考えています。

校長となった今は、生徒と直接かかわる機会は多くありません。ですから、出来るだけ機会を見付けて、生徒と接するようにしています。何より、生徒とかかわることが好きだからです。毎朝、学校近くの道路に立って交通安全指導を行い、生徒や保護者と一緒に花壇の整備や草むしりもします。部活動の大会前の激励会（壮行会）では、「花さか爺さん」を替え歌にした本校の応援歌を歌って生徒を励ましています。

週1回行う、不登校の生徒のための勉強会（水曜勉強会）も楽しみの1つです。水曜日の夜、不登校の生徒を学校に呼び、数学と英語の授業をします。生徒は学ぶ面白さを味わい、中には1カ月ほどで不登校から立ち直り、学校に来るようになった生徒もいます。

名取市立増田中学校校長
佐藤俊隆　さとう・としたか
「生徒が伸び伸び育つよう、先生方も伸び伸びと指導に当たれる学校環境をつくりたい」

名取市立増田中学校
川口哲央　かわぐち・のりお
2学年主任。体育科担当。「学年の先生方とは常に情報を共有することで共通理解を図るように心掛けている」

名取市立増田中学校
大森浩美　おおもり・ひろみ
1学年担任。理科担当。「高い目標を持ち続けることで、生徒と共に、私自身も成長していきたい」

人生や生活に根差した本質的なテーマを大切に

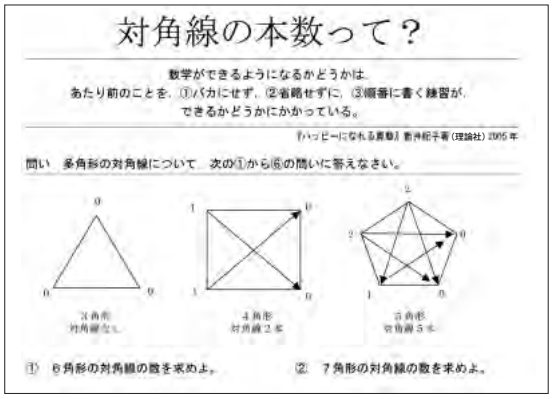
通常の授業にも出来る限り顔を出すようにします。先生方の授業を見るのはもちろんですが、出張や年休の先生の代わりに私自身が教壇に立つこともあります。本校ではそれほど多くはありませんが、過去に校長として赴任した中学校では、1年間で60時間ほど授業を行いました。ある時は、参加希望者50人を1つの教室に入れて、授業を行ったこともあります。授業におけるかかわり合いを何よりも大切にしたいからです。

補欠授業では、課題プリントを基に、国語であろうと数学であろうと、私自身がその教科の授業にチャレンジするよう心掛けていま

す。その際、気を付けているのは、教科の課題に、生徒の日常生活や私の経験を重ね合わせて考えさせることです。例えば、英語では人権や自然環境など、いろいろなテーマと重ねることが出来ます。単なる知識や技能ではなく、人生や生活に根差した本質的なことを大切にし、知識を総動員すれば解けるような題材を提示しています（**図1**）。

新課程になり、授業時数が足りないといわれていますが、先生方には年間に行う授業の3分の1でもいいので、生徒の心に響く面白い授業をしてほしいと思います。中学校の教育のゴールは、その教科を好きにさせて高校に送り出すことだと、私は思っています。好きでさえあれば、後は自分で勉強するようになり、学力も付いてくるはずです。

図1　水曜勉強会の教材


対角線の本数って？

数学ができるようになるかどうかは、
あたり前のことを、①バカにせず、②省略せずに、③順番に書く練習が、
できるかどうかにかかっている。

『ハッピーになれる算数』新井紀子著（理論社）2005年

問い　多角形の対角線について　次の①から⑥の問いに答えなさい。

①　6角形の対角線の数を求めよ。　②　7角形の対角線の数を求めよ。

佐藤校長が水曜勉強会で使用した数学教材。得意な生徒も苦手な生徒も一緒に考えられる教材とするのがモットーだという
＊同校の資料をそのまま掲載

私と生徒とのかかわり方

学年集会などの場を生かし生徒に飛躍の機会を

2学年主任／体育科担当　川口哲央先生

教師同士の情報交換を基に「デビュー」の機会を探る

生徒の意欲を高めるために学年主任として気を付けているのは、出来るだけ生徒に活躍する機会や表現する場を与えることです。

例えば、担任と相談し、普段人前に立つ機会の少ない生徒に、中総体への意気込みを全校集会で発表させました。一言、二言でもかまいません。みんなの前で自分で話すことが重要なのです。こうした機会を学年では「デビュー」と呼んでいます。教師が意図的にデビューの機会を与え、自信を付けさせることを大切にしています。「やりたい人」と聞いたら手を挙げる生徒は必ずいます。そうした生徒だけではなく、力はあるけれども自分では手を挙げられない、少し背中を押したら次に進めるという生徒を出来るだけデビューさせたいと考えています。一度発表して、もう嫌だと思うかもしれません。しかし、機会を与えられたことには自信を持ってほしい。そして、次に同じような場面があった時、自分から手を挙げてくれればいいと思うのです。

絶好のタイミングで生徒をデビューさせるためには、教師間での密な情報交換が重要です。学年部会などの改まった場に限らず、本校の職員室では、授業を終えて帰ってきた先生の間で「今日はこんなことがあった」「あの生徒がこういうことを言った」という会話が飛び交っています。そうした話の中から、もっと伸ばしたい、もう一段自信を付けてほしいという生徒を探り出し、担任と相談してデビューの機会をうかがいます。

担任の判断により「この子はまだ」となれば、デビューは見送ります。逆に先生から「この生徒の作文を学年便りに載せたい」という提案を受けることもあります。生徒が飛躍するチャンスを逃さないためには、学年スタッフの風通しの良さが重要なのです。

生徒指導も「叱り方」次第でやる気を高めるきっかけになる

生徒指導も、生徒のやる気を高める機会と捉えています。私は長年、生徒指導を担当してきましたが、いつも心に留めているのは、「罪を憎んで人を憎まず」ということです。やってしまったことには罰を与えるけれども、その生徒の性格や人間性までは決して踏

生徒の心に火をつける

み込まないというのが生活指導の基本です。

例えば、体育の授業中、ふざけた生徒がいたら、笛を吹いて全体を止め、その生徒を叱ります。その時、感情的に怒りをぶつけるのではなく、生徒の行為をきちんと「叱る」ことが大切です。感情的になって気持ちを引きずってしまうと、その後、その生徒が良い演技をしていても、冷静に見ることが出来なくなります。気持ちを切り替えて、次の場面で良いところを褒めれば、生徒も「先生は自分の行為を叱ったのだ」という思いを持ってくれるでしょう。教師が指導にめりはりを付けることで、生徒もやっていいことと悪いことの区別を自ずと付けられるようになります。

授業や行事、普段の生活などのあらゆる機会が、生徒にとって成長のチャンスという意識を持って、教師は生徒をしっかり見つめていくことが大切だと思うのです。

私と生徒とのかかわり方

教師が高い目標を持つことが生徒の意欲に火をつける

1学年担任／理科担当　大森浩美先生

「本物」を見せることで好奇心を刺激する

担当教科の理科の授業では、生徒に出来るだけ「本物」に触れさせることを意識しています。教科書を使って説明するだけでも、授業はある程度成り立ちます。しかし、生徒は一人ひとり生活体験が違うので、理科の事象を説明しても、生徒によって見たことがある、ないという個人差が生じます。そうした違いを埋めるためにも、できるだけ本物の素材を授業に持ち込むことが、生徒の意欲を高めるためには必要だと考えています。だからこそ毎回、素材選びにはこだわります。

また、生徒は実際に手を動かしたり、いろいろなものを触ったりすることが好きなので、実験などの場面では、出来るだけ自由に活動させるようにしています。失敗も少なくありませんが、口頭で説明するだけでは理解できない生徒もいるので、あえて失敗から学ばせることも大切だと思っています。

今年は1年生の担任をしています。入学当初はルールを教え込むことを徹底し、生活が軌道に乗ってきたところで、時間を守ろう、課題をしっかり提出しようというような目標を与えるようにしています。その際、学年内で連絡を取り合いながら生徒に伝えていくことで、生徒は学校ではいろいろな先生が見てくれているという意識を持ち、緊張感を持って学校生活を送ってくれるようになります。

生徒が悩みを抱えて元気がない時は、他教科の先生や部活顧問の先生とも連携を取り、今の状況にふさわしい先生に話を聞いてもらっています。生徒の悩みを全て担任が解決できるわけではありません。担任としては、まず生徒自身の様子や生徒同士の会話などから変化をキャッチすることが、意欲を継続させる上でも大切だと考えます。

もう一つ重要なのは、教師自身が常に高い目標を掲げておくことです。教師側が簡単に現状に満足してしまうと、生徒もそれでよいと考えて努力をやめてしまいます。自分の基準が生徒の基準になってしまわないように、今よりもっと良くなれるという気持ちを常に生徒に見せていくことで、私自身はもちろん、生徒も成長していくのではないでしょうか。

図2　学年便り

週1回発行する学年便りは生徒をデビューさせるために欠かせないツール。いろいろな生徒を登場させ、その努力を認めて自信を付けさせる

学校全体の取り組み

地域で認められる経験が生徒の自己肯定感を育む

毎日の学習記録で生徒の変化を逃さずつかむ

自ら学習に取り組む姿勢を身に付けるために、同校では学習記録「チャレンジ増田」を活用している。毎日、前日の学習時間を記録して担任に提出するもので、全学年で年間を通して実施する。学習記録は、担任がチェックしてコメントを書いて返却する。13年度の1年生では、毎月、各クラスの生徒の担当者がクラスの学習時間を集計し、学習時間の多い生徒の名前を掲示して、頑張っている生徒が一目で分かるようにした。

生徒に学習時間を意識させるのがねらいだが、担任にとっては、生徒の変化をつかむためのツールでもある。普段は学習している生徒の学習時間が減れば、担任は生徒の周辺に変化を読み取り、生徒に声を掛けることが出来る。

また、生徒の主体的な学習を促すために、同校では全学年とも、定期考査の3日前は部活動を休みとし、毎日1時間ほどを生徒の質問時間に充てる。5教科の教科担当が教室にいて、生徒は自由に質問が出来る。実際に教師に質問する生徒は各教科10人程度だが、普段、人前では質問できない生徒も、静かな教室で落ち着いて指導を受けることが出来る。「クラスの枠を取り払っているため、普段は見えない人間関係が分かります。生徒指導面でも意義があります」と大森先生は語る。

地域からの信頼が厚い「増中マナップ隊」

社会貢献を通して生徒の自己肯定感を高めることも重視している。

「増中マナップ隊（マナーアップ隊）」は、有志の生徒で組織するボランティア団体だ。月1回のペースで、あいさつ運動、ゴミ拾い、駐輪場の点検整備などを行っている。学期に1回は、校区にある増田小学校の通学路に立ち、朝のあいさつ運動を実施したり、地元の警察署や防犯協会と共に、近くのショッピングモールでチラシを配ったりする。冬には学校周辺の除雪作業も行い、地域の運動会ではマナップ隊の3年生が審判を務める（**写真**）。

マナップ隊はあくまでも自由参加だが、12年度は3学年合わせて80人もの生徒が参加した。「地域の人たちからも良い評価をいただき、警察署からは今後もぜひ続けてほしいというお話をいただきました。生徒の自己肯定感も高まると共に、活動を通して自分たち自身で身を律するところもあると期待しています」と川口先生は語る。

生徒や保護者のアンケート評価も高い。「秩序が保たれ安全で安心できる学校に近づいている」（3・5点）、「学校は交通マナーの徹底を図る努力をしている」（2・3点）、「学校はボランティア活動の推進を図っている」（1・7点）（いずれも回答は4段階評価で最高は10点、最低はマイナス10点、平均値は0点）などの項目で、いずれも平均値を上回っており、生徒や保護者からも一定の評価を得ていることが分かる。

写真　生徒同士が主体的に活動を行うのが「増中マナップ隊」の特徴。隊長の号令の下、生徒同士で打ち合わせを行い、それぞれの役割をこなしていく中で主体性が培われていく

学校事例 2

認められる経験を通じて培う自尊感情がやる気を生み出す

福井県 永平寺町永平寺中学校

授業前の黙想や無言清掃などで全国的に知られる永平寺町永平寺中学校。落ち着いた学校環境の中で、生徒の学びに向かう真摯な姿勢の涵養（かんよう）や学び合い高め合う集団づくり、主体的な学習態度の育成に力を入れている。

私と生徒とのかかわり方

まず、生徒一人ひとりをしっかり理解する

宮下洋一 校長

校門で誕生日の生徒に「おめでとう」と声掛け

「子弟同行」は本校の伝統です。全校で毎日放課後に行う無言清掃、授業前の黙想、校門を出入りする際の礼は、20年以上続く本校の伝統であり、生徒と共に教師も実践することが暗黙の約束になっています。

私は2013年度、地元の小学校から本校に赴任しました。全校生徒188人の小規模校ということもあり、生徒全員の顔と名前を覚えようと、毎朝、生徒会執行部と一緒に校門前に立ち、生徒一人ひとりにあいさつをしています。その際、誕生日の生徒を調べておき、校門で「おめでとう」と声を掛けるようにしています。「校長先生は自分を見てくれている」と生徒に感じてもらい、学校生活に前向きに取り組む意識が少しでも高まることを望んでいます。授業を見て回る際も、教師の教え方よりも生徒の様子に気を配り、生徒が授業にどのようにかかわっていたのかという観点から、先生方にアドバイスをしています。

生徒とのもう1つの接点は学校便りです。時間を見付けてはカメラを片手に校内を回り、生徒の活動を写真に収めたり、生徒に取り組みの感想を書いてもらったりして、それらを学校便りで紹介しています。生徒の頑張っている様子を全校生徒や保護者に向けて発信することで、生徒一人ひとりの自己肯定感を高めるきっかけになればと思っています。

School Data

◎1950（昭和25）年開校。「自立・振気・敬愛」を校訓とし、「磨き合う」を教育目標に掲げる。曹洞宗の大本山永平寺における参禅学習、授業前の黙想や無言清掃などを通して「礼の心」を育むことを重視している。

校長◎ 宮下洋一先生

生徒数◎ 188人　学級数◎ 6学級

所在地◎ 〒910-1212　福井県吉田郡永平寺町東古市22-46

TEL◎ 0776-63-2075　eメール◎ eichu@mmek.jp

URL◎ http://www.town.eiheiji.fukui.jp/eichu/

公開研究会◎ 未定

行事などがない時は、生徒が毎日記入する生活記録ノートのよいコメントを、担任から教えてもらい、生徒の許可を得て学校便りに転載しています。学校便りで誰を掲載したのかは全て記録し、偏りなく生徒を紹介するようにしています。

生徒の中に私自身が入っていく機会はそれほど多くはありません。先生方の授業や先生方に毎週提出していただく指導計画を見てアドバイスすることで、間接的に生徒の意欲を高めていくことが、校長としての私の仕事だと考えています。

私と生徒とのかかわり方

間違いを認め合える雰囲気をつくる

3学年主任・担任／数学科担当　竹内文江先生

生徒が「出来た」という瞬間を見逃さない

担当教科である数学は、小学校で苦手意識を持って中学校に進んでくる生徒が多い教科です。そこで、生徒の意欲を高めるために私が意識しているのは、「間違えるのは当たり前」という意識を生徒に浸透させることです。

でも、初めは間違いを恥ずかしがる生徒もいます。そのような生徒には、「社会に出てからも間違えることはある。その時にごまかしたり言い訳したりするよりも、『間違えたのでやり直させてください』と言える方が大切だと思うよ」と言って、間違いと向き合う大切さを伝えています。生徒自身が間違いを認めて、「どうして間違えたのだろう」「どうすれば間違わないようになるのだろう」と考えるようにならなければ、いくら教師が間違いを指摘しても頭に入りません。

生徒が間違いと向き合うためには、間違いを認め合える学級の雰囲気づくりも大切です。私は、問題を解いた後に「間違えた人」と言って挙手をさせています。そして、「良い間違いをしていた人がいたよ」と紹介するのです。間違いから学べることを実感させながら、間違いを許容する雰囲気をつくっていきます。

数学が苦手な生徒には、褒めて自信を持たせることが有効な手立てだと私は思います。最近、こんなことがありました。勉強が苦手でどの教科の宿題も出さない生徒がいるクラスを、2年生から担当することになりました。私は授業の最後の5～10分間を「宿題タイム」と呼び、その時間に習ったことをドリルで復習したり、生徒から質問を受けたりする時間として使っています。宿題タイムの時に、その生徒のノートを見ていたところ、「途中式も書くように」という私の指示を守って、解答までしっかり書いていました。そこで、次の授業でその生徒を指名し、黒板に書いて発表してもらいました。生徒にとっては初めての経験だったようで、その後は背筋を伸ばして授業を受けるようになり、宿題も出来る範囲で取り組んで提出するようになりました。

生徒をしっかり見ることは、教師の仕事の1つです。生徒が出来たという瞬間を見逃さず、褒めて励ますことが、生徒のやる気を引き出す上で何よりも大切だと思います。

永平寺町永平寺中学校校長
宮下洋一 みやした・よういち
「『礼の心』を生徒と共に磨きながら、自立・振気・敬愛に満ちた、温もりのある学校を築いていきたい」

永平寺町永平寺中学校
竹内文江 たけうち・ふみえ
3学年主任・担任。数学科担当。「生徒の小さな変化にも気を配り、やる気を高めていきたい」

永平寺町永平寺中学校
田上由美 たがみ・ゆみ
2学年主任・担任。音楽科担当。「生徒には、失敗を通してさまざまなことを学んでほしい」

生徒の心に火をつける

私と生徒とのかかわり方

全ての生徒がリーダーになれる場面をつくる

2学年主任・担任／音楽科担当　田上由美先生

かつての失敗から学んだリーダーづくりの秘訣

クラスづくりを進める際、特に意識するのはリーダーづくりです。行事や場面ごとに軸となるリーダーをつくることで、生徒自らが考えて動く集団にすることが、活気あるクラスとなるには何より大切だと考えます。

その際、リーダーとしての気質を持つ生徒にばかり頼らないようにしています。活動・場面ごとにふさわしいリーダーを選び、生徒が達成感や満足感を抱ける機会となるように工夫していくのです。例えば、理科の先生から「今日の実験でAさんが頑張っていた」と聞いたら、Aさんに「まとめの時間に感想を発表したら」と声を掛けます。また、漢字コンテストに向けて学習している時に、「漢字が得意なBさんに丸付けをしてもらいましょう」とクラス全体に呼び掛けます。

学習の場面だけではありません。冬には、ストーブに灯油を入れる係の生徒を「灯油大臣」と呼んでリーダーにします。「大臣」として表に立つことを嫌がる生徒は「副大臣」に任命し、「あなたの力が必要なんだよ」と言ってサポートを任せます。何らかの役割を任されることで、生徒は周囲から認められていることを実感します。そして、クラスの一員としての自覚を深めると共に、物事に向かう意欲を高めていくのです。

このクラスづくりの方針は、私自身の失敗経験に基づいています。かつて生活指導に課題のある学校に勤務していた時、私は、生活指導や学習指導の中で守るべき基準を明確にして、出来ていない生徒の態度を改めさせようと指導しました。それは、きちんとしている生徒を生かしたいという思いもありしていたことなのですが、生徒の人間関係を考えずに、一方的に「出来る生徒」と「出来ない生徒」という線引きをしてしまっていたのです。その結果、リーダーとして期待していた生徒との関係もぎくしゃくしてしまいました。

担任が一方的に基準をつくり、クラスを1人で引っ張っていこうとしても無理なのだと痛感しました。生徒が主体的に動く中で、担任のサポートやアドバイスがあり、達成感が生徒に返っていく。それが、生徒の成長を促し、私自身の充実感にもつながっていくのだと気付いたのです。

学習計画表の作成を通して主体的な生活態度を養う

学習に対する意欲を高めるために、学年主任として取り組んでいるのは、定期考査前の学習計画表です。これまでも、学習した時間の結果を記録する用紙はありましたが、その上段に学習予定を書くようにしました。そして、試験後、予定を基に時間の使い方を振り返らせています。生徒は自分がいかに時間を無駄に使っているか、無駄な時間を整理すると、習い事や、ゲーム・テレビの時間などの自由な時間が生まれることに気付くようです。ただ単に「ゲームは駄目」「テレビは見ない」と指示するのではなく、生徒自身に生活をデザインさせることで、時間の効率的な使い方を学んでほしいと考えています。

このように、生徒の主体性を尊重することで、「やらされている」という後ろ向きな気持ちがなくなり、責任を持って計画通りに実行しようという意識が生まれます。全ての生徒が出来るわけではありませんが、計画通り実行して、直近の中間考査で良い成績を上げる生徒も多くいました。

中学生は、半分は子ども、半分は大人のような存在です。リーダーとして責任を持たせる、生活のデザインを任せるというように、一人前に扱うことで責任感が高まり、主体的に動くようになるのではないでしょうか。

学校全体の取り組み

無言清掃で育む「礼の心」が生徒の意欲の源泉になる

無言の清掃と黙想で「心を磨く」生徒たち

午後3時26分。音楽が鳴り始めると、あちこちで聞こえていた生徒の私語がぴたりと止み、教室や廊下は静けさに包まれた。生徒はその場に正座をして黙想を始めた（**写真1**）。1分後、音楽が止むと各自、持ち場に向かい、掃除に取り掛かる――同校最大の特色である15分間の無言清掃の始まりである（**図**）。

腰をかがめて廊下を拭き掃除する生徒、ドアのレールまで雑巾をかける生徒、ブラシを使わず雑巾だけで便器を磨く生徒……。中でも大変なのは、体育館の清掃だ。生徒が中腰になって、広いフロアの端から端まで雑巾をかける。12分間、生徒は一言も話さず、誰も見ていないところでも手を抜くことなく、黙々と清掃に取り組む（**写真2**）。そして、3時39分に音楽が鳴ると、再び正座して黙想と反省会を行い、清掃活動を終える。

清掃前の黙想は掃除へ向かう心構えを持つため、清掃後の黙想は自分自身を振り返ることが目的である。清掃後はグループごとに反省会を開き、頑張っていた生徒やよく出来たところを振り返り、皆で拍手をして認め合う雰囲気の中で活動を終える。

図　永平寺中学校の清掃の流れ

15：20	6限目の終了
3分間	清掃場所へ移動、清掃の準備
15：23	音楽A
3分間	雑巾を準備したり、息を整えたりする
15：26	音楽B
1分間	黙想正座 ● 今から掃除をしようとする心の準備 ● 今日の「＋αの掃除」について考える
15：27	音楽Bの終了
8分間	基本の清掃
15：35	音楽C〈区切りの音楽〉
2分間	「＋αの掃除」自ら気付いてする掃除
15：37	音楽D〈後片付け開始の音楽〉
2分間	掃除の後片付け、バケツに水を汲む
15：39	音楽E
30秒	黙想正座 ● 自ら気付いて「＋αの掃除」ができたか ● 他にこんな「＋αの掃除」ができたのではないか
	音楽Eが消える
30秒	反省会 ● 班員からの一言　「＋αの掃除」について反省を言う ● 班長からの一言　自ら気付いていた生徒を褒める 「＋αの掃除」の提案、明日の目標
15：40	清掃終了

＊同校の資料を基に編集部で作成

自分たちの活動が認められる喜び

同校で無言清掃が始まったのは、26年前のことだという。当時の同校は、遅刻や服装の乱れ、授業前着席の不徹底など生活上の課題を抱えていた。1987年、当時の鶴田佳三校長は「礼の心」を教育の中心に据え、朝夕の登下校時に校門に立って校舎に一礼する「校門での礼」、授業や集会の2分前に着席し背筋を伸ばして目を閉じる「授業前の黙想」、生徒全員で取り組む「無言清掃」を取り入れた。以来、これらは同校の伝統として受け継がれ、08年にNHKのテレビ番組で紹介されて一躍全国に知られるようになった。

今でも同校には、全国から大勢の学校関係者が見学に来る。「無言清掃は生徒の意欲を高めることを目的とした活動ではありません。しかし、自分たちの取り組みが多くの人々に認められていると実感することで、自尊感情や自己肯定感を育むきっかけにもなっていると思います」と宮下校長は語る。

部外者の目には新鮮に映る無言清掃も、生徒にとっては「当たり前のこと」だ。小さい頃から同校の卒業生である保護者から話を聞いており、入学前に心構えが出来ている。そして、入学後は上級生が黙々と取り組む姿を

生徒の心に火をつける

写真１　清掃前と清掃後に黙想を行う。音楽が鳴り始めると、その場に正座をして目を閉じる生徒たち。受け身の掃除ではなく、主体的に自ら考える清掃を目指している

写真２　清掃の間、生徒は一言も話さない。互いに気配を感じ取り、自分がすべきことを黙々とこなす

見て、自然に感化されていく。

「入学後、最初の3日間で基礎の形をつくり、3週間で形をマスターし、3カ月で当たり前となり、3年間で感謝の気持ちを持って清掃する態度が身に付きます。本校での経験は、卒業後もいつまでも心に残るでしょう」と宮下校長は語る。

1年生の時は、「3年生のように時間内に清掃を終えることが出来ない」と感想を書いていた生徒も、毎日の積み重ねによって時間内で清掃を終えられるようになる。作業が早くなるだけではない。他の人がバケツをどかした後に残った水滴をきれいに拭き取るなど、誰に言われるわけでもなく、褒められることを期待するでもなく、自然にそうした動作が現れてくるのだ。

「円滑な人間関係や集団活動には、人間関係をつなぐ『のりしろ』となる人材が必要です。清掃の場面だけではなく、どんな場面でも自分がなすべきことをしっかりやり遂げ、周りの人に気を配ることが出来る力が育っていると感じます」と、田上先生は強調する。

各種コンテストで「やれば出来る」を実感させる

永平寺中学校では、漢字、ことわざ、計算、地名、理科、年表、英単語など、各教科の基礎事項のコンテストを実施し、基礎・基本の定着を図っている。

漢字や英単語、計算などのコンテストは定期考査に合わせて行い、定期考査の出題範囲と重なるように問題を設定する。頑張れば、定期考査でもある程度得点できるため、自ずとコンテストに向けた学習にも力が入るという。地名コンテストでは、日本地理なら1年生は都道府県名、2・3年生は県庁所在地、世界地理は覚える国の数を徐々に増やすというように、段階的にレベルを上げている。

コンテストの目的は、「やれば出来る」という達成感を持たせることにある。最低ラインである合格点は90点以上。全問正解した生徒は「満点賞」として、学年集会で学年の生徒全員から拍手を受ける。年間を通して全て満点だった生徒への表彰もある。計算は苦手だが、漢字ならいつも満点というように、得意分野で力を発揮する生徒もいる。逆に、合格点に達しなかった場合は、合格点に達するまで教師が指導し、基礎学力を保証する。

「漢字や地名なら、指定された範囲の学習にしっかり取り組めば必ず点数は取れます。定期考査では思うように結果が出せない生徒でも、やれば出来るという気持ちを実感できるところがコンテストの最大のメリットです」と宮下校長は述べる。

また、同校では、1・2年生の1学期にグループエンカウンターを取り入れて学級づくりを行い、その集大成として1年生は自然教室、2年生は永平寺における参禅学習を行い、自分を見つめ直す機会を設けている。

「自分が認められているという気持ち、本校の生徒であるという誇り、やれば出来るという自信が、生徒を前向きにさせているのです」（宮下校長）

学校事例 3

個に応じた見取りと指導で生徒の背中を押す

東京都 世田谷区立太子堂中学校

世田谷区立太子堂中学校は、全校生徒81人の小規模校。生徒の数が少ないことをメリットと捉え、生徒一人ひとりの個に応じた指導を徹底している。教師は、生徒の個性や将来の夢を踏まえて、場面に応じた声掛けを工夫することで、生徒の心に火をつけようとしている。

私と生徒とのかかわり方

生徒が将来の夢を描くための手助けをしたい

冨士道正尋校長

担任と生徒の絆を深めるため校長が裏方に徹することも必要

本校は各学年1クラスの小規模校ですが、生徒数が少ないことを弱点と考えず、少ないからこそ出来る指導を目指しています。

私が行うのは、まず生徒全員との面談です。2学期の昼休みと放課後、1日4人ほど校長室に呼び15～20分間、生徒の話を聞きます。たいてい将来の夢を尋ねます。将来何になりたいのか、どのような道に進みたいのか。どんなに現実離れした夢でも、私はまず関心を示し、最後に必ず「応援しているよ」と励ますようにしています。夢がないという生徒には、興味のあることや好きなことを切り口に話を聞きます。今すぐでなくても、将来、生徒が夢を描く際に少しでも後押しになるような話が出来ればよいと考えています。

こうした話は、担任もしていると思いますが、校長と担任とでは、生徒の受け取り方が自ずと変わると思います。それは、立場による生徒との距離感の違いにあると考えます。生徒と触れ合う時間は、担任の方がはるかに多いでしょう。しかし、普段から接点の多い担任や、毎日顔を合わせる保護者からの話がいつも刺激になるとは限りません。普段、話すことのない校長先生との話だからこそ、得られる刺激や充実感があると考えています。

日々生徒と接する担任の先生方が動きやすいように、後方支援をすることも校長の大切な役割です。生徒との面談、登校指導や集会

School Data

◎1947（昭和22）年開校。複数担任制によるきめ細かい指導、国語・数学・英語の基礎学力を身に付ける「学力アップタイム」、英検や漢検の合格を目指す「水曜学習教室」など学力向上に向けた取り組みを積極的に展開。

校長◎ 冨士道正尋先生

生徒数◎ 81人　学級数◎ 3学級

所在地◎ 〒154-0004　東京都世田谷区太子堂3-27-17

TEL◎ 03-3413-0810

URL◎ http://www.setagaya.ed.jp/ttau/

公開研究会◎ 未定

生徒の心に火をつける

などの場面で私が語り掛けることと、普段担任が話していることが違うと、先生方に対する生徒の信頼が薄れてしまいます。逆に、どの先生も言うことが同じであれば、「担任の先生が言っていることは本当なんだ」「先生の言うことを聞こう」という意識が芽生え、自ずと生徒の顔も担任の方に向くようになるはずです。

そのためには、学校の経営方針をしっかり先生方に伝えて、組織全体で共有する必要があります。その方針を実現するために、各分掌・教科がそれぞれの役割を果たしていく強固な組織づくりが欠かせません。教師の個々の力を高めると共に、学校全体で意識をそろえて、生徒を見守る組織力を磨きあげることも校長の大切な役割の1つだと考えます。

先生方には取り組みの意義を生徒に熱く語ってほしい

生徒が意欲を高めるためには、先生方が授業の魅力や学校活動の意義について、なぜ必要なのか、なぜやらせたいのかを熱く語ることも必要です。そのために、私が意識するのは、取り組みの意義を先生方に問い掛けることです。例えば、ある先生が「移動教室でこの施設に連れて行きたい」と申し出た時、私は必ず理由を聞きます。「理科の授業で地層を教えているので火山の実態を見せたい」というのであれば喜んで了承しますが、「去年も行ったから」という理由では却下します。

先生自身が活動の魅力を知っていれば、生徒に「そこに行ったら必ず○○を見よう」「○○があるから触るとよい」と熱く語ることが出来ます。行く前に生徒をわくわくさせて、終了後は「見てきたか」「すごかっただろう」と言って達成感を与える。そうした期待と充実感を与え続けることで、別のものも見たい、こんなことをしたいという意欲に火がつくのです。「毎年やっているから」という理由では、生徒の心は動かないと思うのです。

世田谷区立太子堂中学校校長
冨士道正尋 ふじみち・まさひろ
「自ら課題を見つけ、知識や情報を基に解決できる力、チャレンジする姿勢を育てていきたい」

世田谷区立太子堂中学校
加藤清春 かとう・きよはる
主幹。1学年主任。数学科担当。「自分に足りないことを客観的に把握し、自分を高める姿勢を身に付けてほしい」

世田谷区立太子堂中学校
宍戸弘子 ししど・ひろこ
2学年担任。社会科担当。「努力は絶対に報われることを信じて、チャレンジし続ける生徒を育てたい」

私と生徒とのかかわり方

授業外でも生徒を把握し、個に応じた声掛けを行う

1学年主任／数学科担当　加藤清春先生

「もっとやってみたい」と思わせて授業を締めくくる

私が数学の授業で心掛けているのは、生徒がもっとやってみたいと思わせるような投げ掛けをして締めくくることです。「この問題には実はこんな解き方もある」というように、発展的な内容を少し話し、余韻を残して授業を終える。いつもうまくいくとは限りませんが、中には興味をかき立てられ、授業後に質問に来てくれるようになる生徒もいます。

数学が苦手な生徒のために、デジタル教材も活用しています。特に生徒が喜ぶのは、線が自動的に動いて図形を作るような機能です。「この後どうなると思う?」と想像させるだけで生徒はわくわくします。期待を高めてじらしたあげくに、ボタンを押して図形を動かす。デジタル機器をうまく活用することで、生徒はより授業に積極的になり、知らず知らずのうちに理解も深まります。

普段の生徒との会話が授業の成否にかかわる

日頃からどれだけ生徒とコミュニケーショ

ンが取れているかも、生徒のやる気を高める上で欠かせない視点です。生徒が解答に苦戦している時、単に分からないという場合もあれば、何かの悩みを抱えていてやる気が出ないから解けないということもあります。状況に応じて生徒への声掛けや対応も変えていかなければなりません。

その時、的確な声掛けをするためには、授業中の生徒の姿だけを見ていたのでは不十分です。ささいなことでも、出来るだけ普段から声を掛け、コミュニケーションをする機会をつくることが大切です。

前任校で、授業を担当していない生徒にも声を掛けていたら、ある生徒から卒業時に、「先生に話し掛けてもらえたのがうれしかった」と書かれた手紙をもらいました。いろいろな先生に見守られているという思いは、勉強に対するやる気にもつながってくるのではないでしょうか。逆にいわゆる荒れた学校に勤務していた時には、授業中、注意ばかりして、多くの時間を生活指導に割いていました。学習が進まないばかりか、授業自体が後味の悪いものになっていたのです。私自身、むなしいですし、生徒ももっと授業を受けたいという気持ちにはならないでしょう。

当たり前のことですが、やはり普段から生徒をしっかり見て、生徒一人ひとりを理解することが大切なのだと実感します。生徒の内面を知った上で注意するのと、表面的な行為だけを見て注意するのでは、生徒の態度は全く異なり、指導の効果も変わります。

今後も、生徒一人ひとりの個性に応じたきめ細かい指導を心掛けながら、生徒の好奇心を高めるような授業を工夫していきたいと思います。

私と生徒とのかかわり方

成功体験の積み重ねが生徒の意欲を継続させる鍵

2学年担任／社会科担当　宍戸弘子先生

体験から得た自信が意欲を生み新たなチャレンジへ向かわせる

生徒の意欲を高める上で大切なのは、成功体験の積み重ねだと思います。それが最も実現しやすいのは学校行事です。自分のためだけではなく、みんなのため、クラスのために頑張って達成感・充実感を得る経験を積み重ねることで、物事に取り組む意欲を育み、かつ継続していけるのではないでしょうか。

行事では、生徒の主体性を重視します。行事の成功を最優先とし、担任主導で進めると、生徒が受け身になり、かえって行事は活気のないものになってしまいます。生徒自身がやり遂げたという達成感を持って終わらせることが、次の取り組みへの意欲を育むのです。

行事を成功させるためには、結果よりも過程が大切だということも、生徒にはよく話します。体育祭のMVPを決める際も、華々しい結果を残した生徒ではなく、裏方でコツコツ働いていた生徒の姿や陰の努力を必ず紹介するようにしています。

それは行事だけではなく、普段の生活にも言えることです。行事の結果は、毎日の生活の積み重ねの結果です。授業や家庭学習も含めて、普段の生活が整っていなければ、仲間と協力して何かを成し遂げようという意欲も湧かず、自信を持って前に進むこともできないでしょう。

「継続は力なり」「努力は報われる」と教師が言うだけでは、生徒は実感が湧かないかもしれません。そこで、「先輩たちを見てごらん」と言うのです。例えば、先輩がどれだけ努力をして第1志望校合格を実現したのかという話は、生徒たちも耳を傾けます。

体験から得た自信が意欲を生み、新たなチャレンジへ向かわせる。そういうサイクルの積み重ねが、学習に対する意欲を高め、卒業後も目標に向かってひたむきに努力する素地をつくるのではないでしょうか。

生徒の心に火をつける

学校全体の取り組み
一人ひとりの課題に応じたきめ細かい指導を徹底

小中接続教材を導入し中学校への期待感を高める

同校のほとんどの生徒が、太子堂小学校の卒業生だ。そこで、両校は小中接続の取り組みを続けている。

その1つは、太子堂中学校独自の接続教材『太中への道』だ。小学校6年間で学んだ内容の復習から、中学校生活の決まりごと、各教科の勉強方法、予習・復習の方法までを網羅した生活と学習の手引きだ。進学前に配布し、中学生としての心構えを養うのがねらいだ。2012年度に始めた取り組みで、初年度は太子堂小学校の教師が復習問題を作成した。13年度は区の予算を得て、小学校側の負担を減らすために学校外の事業者に作成を依頼した。

「小学校を卒業し、春休みは気が緩む時期です。中学校に上がる前に小学校の復習をして、入学前の心構えを整えてもらおうというのがねらいです。小学生にはプレッシャーになるかもしれませんが、良い意味での緊張感はあった方がいいと思っています」（冨士道校長）

課題は、大半の生徒が入学前に提出する。生徒にとっては、小学校から中学校へとステップを上るという良い刺激になっている。一方、教師にとっては、課題の取り組み状況を見て、入学前にある程度、生徒の学力が把握できるため、導入期の指導もスムーズに行えるメリットがある。

個々の学力に応じた個別指導で分かるまで教える

生徒のやる気を持続させ、学力向上を図るために、同校では個別指導にも力を入れている。

学力が極端に低い生徒、何らかの事情で学習が遅れている生徒に対しては、個別指導を行う。一斉授業と同じ時間帯に、該当の生徒は空き教室に行き、同じ教科について専任の教師からマン・ツー・マンで指導を受ける。指導するのは同校の教科担当の他、近隣の大学の学生ボランティアや世田谷区から派遣された講師で、週単位で学年・教科ごとにスケジュールを組んで実施している（**写真**）。

冨士道校長は、「授業が分からないまま3年間、教室の椅子に座り続けるのは、生徒にとって苦痛以外の何ものでもありません。一斉授業では付いていけない生徒も、マン・ツー・マンなら気軽に質問し、分かるまで説明してもらうことが出来ます。表向きは『嫌だ』と言っている生徒も、付きっきりで見てもらえることが内心、うれしいようです。授業が分かれば、生徒は学校に来たくなります。そうした救いにつながるような取り組みを、出来る限り実践していきたいと考えています」と話す。

小規模校の特徴を最大限に生かして、きめ細かい指導で生徒の意欲を持続させる太子堂中学校。こうした教師たちの地道な努力の積み重ねは、生徒の学校生活満足度80％という高い数字にも表れている。

写真　3年生の個別指導の時間。学生ボランティアと区から派遣された講師の2人が、生徒にマン・ツー・マンの指導に当たっている

生徒の新たな面を見付けて褒め 生徒自ら設定した上限を取り払う

三重県 四日市市立楠中学校

一小一中では、生徒同士の気心が知れている半面、評価や役割が固定し、生徒は今以上の何かを求めて行動することが難しい。四日市市立楠中学校では、そうした状況を打破しようと、学年団、全校で生徒を見取り、連携しながら声を掛けることに注力する。

私と生徒とのかかわり方

いつ、どのように褒めるかが、やる気をつなげる鍵

佐藤正倫校長

複数の教師で生徒を見取り、新たな良い面を逃さず見付ける

本校は全校生徒320人。いわゆる一小一中で、隣接する四日市市立楠小学校の卒業生がそのまま、本校の生徒となります。生徒は互いに気心が知れていて仲が良い半面、なれ合いの活動になりがちで、リーダーもなかなか育ちません。全ての生徒が感動する学校をつくっていくためには、教師の力で生徒を動かすのではなく、生徒たちが自らの手で企画運営し、実践することが大切です。

私は、生徒一人ひとりが互いの違いや良さを認めた上で、目標に向かって主体的に頑張る姿勢を、中学校卒業までに養いたいと考えています。担任だけではなく、いろいろな教師の目で生徒の新たな良い面を見付けて伸ばし、自信を付けさせる。そして、学習だけでなく、あいさつや掃除といった生活面での学びも大切にし、生徒を多面的に評価することで、学習面と生活面の相乗効果を図ろうとしています。

校長としては、生徒との距離感を保つことも大切です。日常的に生徒一人ひとりに声を掛けるというよりも、行事などの節目に、生徒全員、学年全体や生徒会に良かった面を伝えるようにしています。

本校では、大きな行事の後には生徒会役員が校長室を訪れ、成果報告をするのが慣例となっています。6月に行われた体育祭の報告に来た際は、「今年の体育祭は生徒会として

School Data

◎1947（昭和22）年開校。鈴鹿川の河口にある楠町に位置する。目指す子どもの姿は「自分を愛し、一人ひとりの違いを認め、未来に輝く子ども」。生徒の良さを認め、生徒の力を信じ、生徒の目線に立った教育を目指している。

校長◎ 佐藤正倫先生

生徒数◎ 320人　学級数◎ 11学級（うち特別支援学級1）

所在地◎ 〒510-0103　三重県四日市市楠町北五味塚2092

TEL◎ 059-398-3132

URL◎ http://www.yokkaichi.ed.jp/kusuchu/

公開研究会◎ 未定

生徒の心に火をつける

何が良かった?」と切り出し、生徒の考えを引き出しました。「体育祭のテーマが良かった」と生徒が答えると、「そうだね。最初は『飛翔』というキーワードだけでしたが、『昨日の自分を越える』というサブテーマを付けたことで、更に分かりやすくなりました。あれは良かった!」と生徒に共感し、良い点を具体的に挙げて褒めます。空気が和み、「幼稚園児とのダンスはどうでしたか?」と更に問い掛けると、「楽しかった!」「かわいかった!」と生徒はとても良い表情をします。このようにして、体育祭の充実感を改めて全員で共有した後、「良い体育祭にしてくれて本当にありがとう。次の文化祭は2年生が中心かな。体育祭を経験しているから、きっと良いものになると思う。3年生は勉強を頑張る時期だけど、後輩にアドバイスすることも大切だよ」と伝えました。

写真　行事後は、生徒会役員が必ず校長室を訪れ、成果を報告する。その時は、生徒を褒める絶好のチャンスだ。佐藤校長は、生徒が自ら頑張った、成功したと思っている点を聞き出し、重点的に褒めた。また、このやりとりを若手教師が見て、指導法を学ぶ場にもなっている

生徒自身が一番頑張ったと思うところを引き出して認め、具体的に褒める。そして、次の目標にも言及し、やる気をつなげる。ただ褒めれば良いのではなく、どういうタイミングでどのように褒めるかが重要だと考えています。

また、ボリュームゾーンである中間層の生徒全ての意欲を高めることは難しいですが、授業でも行事でも生徒の意見を大切にし、生徒自らが活動できるようにすることが、何よりも大切だと思います。

若手教師へのプラスワン研修で生徒へのかかわり方を伝授

本校の教師は平均年齢39・8歳で20代が8人と若手教師が多く、生徒のやる気を引き出すには、教師の育成が欠かせません。以前は、先輩教師の指導をまねたり、自主的に集まって議論を交わすなどして、生徒への向き合い方を自然に身に付けていましたが、今の若い先生は、このような方法で学ぶ経験を学生時代にしていません。そこで、「プラスワン研修」と称して定期的に若手教師が集まる会を開き、テーマを決めて生徒への声掛けや褒め方などを学ぶ場を設けています。

四日市市立楠中学校校長
佐藤正倫 さとう・まさみち
「授業でも、その他の活動でも、生徒の笑顔が一番大切」

四日市市立楠中学校
井上弘之 いのうえ・ひろゆき
3学年主任。数学科担当。「褒める時も叱る時も、常に生徒に本気で向き合うこと」

四日市市立楠中学校
上原啓江 うえはら・ひろえ
3学年担任。国語科担当。「生徒がすぐに諦めてしまわないように、丁寧に対応していきたい」

例えば、家庭訪問前には、スクールカウンセラーを招き、保護者との話し方を含めたポイントを話し合います。また、合唱大会前には音楽の教師が来て、各クラスの良い点を伝え、アドバイスをします。これにより、教師は合唱の練習時に生徒を褒めつつ、指導も具体的に出来ます。そして、「プラスワン研修」をきっかけに、生徒会役員と私が面会する時などに、生徒に同行し、私が何を伝えているのか、そのポイントをメモするなど、熱心な若手教師の姿も見られるようになりました。

教師が学び合う環境づくりが、結果として教師のチームワークを高め、生徒を複眼的に見て、その良さを引き出すことにつながります。こうした環境づくりは校長の役目だと考えています。

私と生徒とのかかわり方

褒める時も叱る時も、生徒に本気で向き合う

3学年主任／数学科担当　井上弘之先生

教師間の情報共有と「見ているよ」というメッセージが生徒を変える

学年主任を務める3年生は3クラスあり、学年団は担任3人、副担任2人、学年主任1人の計6人です。担任のクラスだけでなく、6人で約100人の生徒を見るという意識を常に持ち、チームワークを大切にしています。

この学年の入学時には、生徒の人間関係に課題がありました。そこで、まず行ったのは、「叱る基準を学年で統一し、生徒にきちんと伝えること。叱る内容は1つに絞ること」と、「生徒の良い面を見付けたら教師間で共有し、褒めること」です。

生徒の中に、教師に対する不信感が強く、学習意欲が低い者がいました。その生徒はノートの取り方が丁寧できれいだったので、授業中にあらゆる教科の教師が「きれいにノート書けているね」と声を掛け続けました。部活動の顧問にも話し掛けてもらうようにするなど、複数の教師の目で見守ると、生徒の学習意欲が徐々に高まり、心も開いていきました。生徒一人ひとりにこうしたアプローチを続けるうちに、生徒の人間関係の課題も解消していったのです。生徒自身が大人になったこともありますが、「大勢の先生がいろいろな面からいつも見てくれている」という安心感が、生徒の自己肯定感を高め、互いの良さを認められるようになったのではないかと思います。

学年全体で良いところを見付けるため、学年集会で「自分のクラス自慢」を学期ごとに行っています。ここで生徒は「黒板が学年で一番きれいだ」など、教師に褒められたことをよく自慢しています。教師に褒められ、認められたことが、生徒の自信につながっているからでしょう。しかし、生徒のやる気に火をつけるのは一筋縄ではいきません。褒めるだけでなく、時には厳しく叱り、教師が嫌われ役になることもあります。そうした時でも、生徒を頭から否定するのではなく、「何とかしたい」という思いで本気で向き合うと、生徒には必ずその思いが伝わると思うのです。

私と生徒とのかかわり方

生徒一人ひとりの課題に丁寧に対応する

3学年担任／国語科担当　上原啓江先生

生徒一人ひとりの課題ごとに声掛けやアプローチを変える

本校の生徒は、頑張ろうという気持ちがある半面、「まあ、いっか」「そこそこでいい」など、諦めの早さや甘さが気になります。例えば、論述問題では、自分にはどうせ出来ないと思い込み、手を付けようともしない生徒が少なくありません。私は、単語しか思い付かないという生徒には、「その単語と単語をつなげてみたらどう？」とヒントを出したり、「ここはどう思う？」と質問をし、答えが返ってきたら「そのことを書いてみたらいいよ」とアドバイスするなど、生徒個々の課題に丁寧に対応することを心掛けています。

また、宿題には漢字の書き取りや意味調べを課すことが多いですが、例えば、漢字の書き取りでは「はね」や「止め」など細かい部分までチェックし、評価に反映しています。なぜならば、「少しぐらいなら許される」と思わせずに緊張感を保つことも、生徒のやる気を引き出すには大切なことだからです。

生徒の心に火をつける

厳しく接する一方、わずかな成長も見逃さずに、「提出物をちゃんと出せたね」などと褒めるようにもしています。休み時間は出来るだけ教室で過ごし、授業中に褒める機会がなかった生徒にも声を掛けます。テレビの話などの日常会話からも生徒の様子をつかみ、「どのような言い方をすれば、生徒に響くのか」を常に考えています。

1対1で話す方がよい生徒、友だちとグループで話している輪の中に教師が入っていって話す方がよい生徒など、さまざまなタイプの生徒がいますので、それぞれの様子を見て、アプローチを変えています。話すことが苦手な生徒には、「スマイルノート」という、次の日の予定と今日の感想を書いて提出するノートを介してやりとりをしています。

生徒と教師の相性もあるので、どの生徒にも私の言葉が響くとは限りません。他の先生に相談して声を掛けてもらうなど、チームで生徒を見ることを心掛けています。また、声掛け自体が響かない生徒も含め、全員同じ意識で諦めずに声を掛けるようにしています。

学校全体の取り組み
掃除やあいさつなど地道な努力が学び続ける力に

人の役に立つことの大切さを伝える「志授業」

ここ数年、同校が力を入れているのは、「人のために何が出来るか」を考えることだ。それを起点として、自分の得意なこと、好きなことを見付け、自己肯定感を高め、将来の目標につなげようとしている。

取り組みの軸となるのは、2012年度に始めた、年1回の「志授業」だ。12年度は、NPO法人「岐阜立志教育支援プロジェクト」の井上武理事長を招き、「夢に向かって」というテーマで講演してもらった。

講演は、井上理事長の「皆さんは自分の人生経営の社長です」という働き掛けで始まった。そして、「社長就任の資格は志を持つこと」と話し、金メダリストの高橋尚子氏や、真珠王・御木本幸吉氏などのエピソードを織り交ぜて、「自分の好きなことや得意なことで、人のためにどう役立つのか」という目標を持って生きることの大切さを伝えた。また、志を実現するには、普段の生活をきちんと行うことが大切であり、「掃除」「あいさつ」「感謝の気持ち」の3つの大切さを強調した。

佐藤校長は、「『志授業』で述べられていた、掃除やあいさつ、感謝の気持ちを大切にすること、人のためになることを見付けることなどは、すぐに学習意欲に結び付くものではないかもしれません。しかし、地道に努力することは、学び続ける力を身に付けるには必要ですし、社会に出ても欠かせない力です。そして、人のためと思うからこそ、目標に向かって頑張れることもあります。すぐに数字で見える効果が出なくても、生徒が少しでも前向きに変わっていくための材料の1つとして、続けていきたいと考えています」と語る。講演の感想文を見ると、生徒にも校長の思いが伝わっていることが分かる。

井上先生と上原先生も、「学習と生活のどちらも大切にすることで、生徒を褒める領域や接点が広がり、褒める量も増えます。また、中学校時代は、中には努力をしなくてもテストで良い点数が取れる生徒もいますが、半面、努力をする経験はどうしても少なくなります。そうした生徒にとっても、掃除やあいさつなど、地道な努力を経験することは『学び続ける力』を身に付けるためには大切なことです」と口をそろえる。

「志授業」は、12年度は1・2年生の生徒と保護者が対象だったが、13年度は小学6年生とその保護者も招き、11月初旬に行う予定だ。今後は、小学校・中学校だけでなく、保育園・幼稚園も連携し、地域一体となって「一人ひとりの違いや良さを認め、人の役に立つ志を持った生徒」の育成を目指していくという。

私たちが実践する子どもの心への火のつけ方

学校外で子どもと向き合う人たちに意欲の引き出し方を聞いた

大人との語り合いで人生の当事者精神を生み出す

ハタモク代表　**與良昌浩**さん

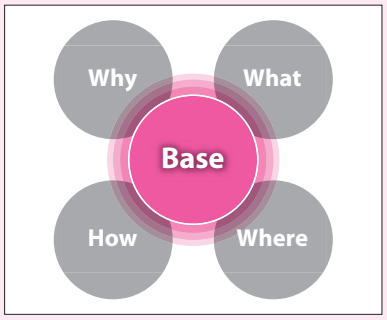
◎安心できる雰囲気があれば内面を語り出す

私が代表を務める任意団体「ハタモク」は、学生・生徒が社会人と働くことの意義や目的を語り合う場づくりをしています。「ハタモク」のワークショップを中学校で行う場合には、生徒3～4人のグループに大学生か社会人が1人ずつ加わり、働く目的や将来の夢などをテーマに語り合います。生徒たちは「自分は何がしたいのか」「なぜその職業に就きたいのか」などについて、私たち大人に自分の言葉で話してくれます。「中学生がそこまで考えているのか」と、驚くこともしばしばです。

「思春期の子どもが見ず知らずの大人に、そんな内面まで話すのだろうか」と思う方もいるでしょう。確かに始まる時は、初対面の大人を前にして身構えています。これでは打ち解けて語り合えませんから、まず大人が自分の悩みや失敗談などを話し、生徒との距離を縮めます。最初に語り合う話題にも気を配り、「好きなアイドルは？」「得意な教科は？」など、答えやすいことを聞いてから、その理由を尋ねることもしています。ただただしかったり、的外れだったりする返答にも、大人は熱心に耳を傾けます。

このような配慮により、生徒が安心して発言できる雰囲気がグループ内に生まれます。これさえ出来れば、「どのような働き方、生き方がしたいか」といった内面に踏み込んだ問いに対しても、生徒は一生懸命に考えて話してくれるようになるのです。

図　ハタモクで使う4種類の質問



「ハタモク」では、生徒の「Base（なりたい自分）」を浮かび上がらせるために、「Why（なぜ）」「What（何を）」「Where（どこで）」「How（どのように）」の4種類の質問を用意。「何がしたいのかが分からない」と悩む生徒でも、複数の視点から問うことで目的を見い出せるという

◎なりたい自分を思い描くことで主体的になれる

将来、自分が何をするために、どのような方向に進みたいのか。こうした問題には答える人の数だけ正解がありますが、自分なりの答えを見付けることは簡単ではありません。私は30歳を過ぎてやっと見付けられましたし、見付けられないまま社会に出る人もいるでしょう。社会に出るまでの時間があるうちに、模範解答のない問題と向き合うことの楽しさを体感し、考える習慣を身に付けてほしいと、私たちは中学生を対象にした「ハタモク」も行いました。

生徒が日常的に考えるようになるためには、普段の語り掛けが最も大切だと思います。例えば、教科指導で正解を問うだけでなく、先生がなぜその発問をしたのかを生徒に質問してみてはいかがでしょうか。先生方は生徒が安心して発言できる雰囲気をつくっているはずですから、きっと活発に意見が飛び交うと思います。

先生方が1人ずつ生徒のグループに加わり、「ハタモク」のように語り合うことも、方法の1つだと思います。または、グループを異学年混合にしてみても良いかもしれません。「ハタモク」で大人が生徒にしたように、先生や先輩が生徒の話を受け止めることが出来れば、有意義な話し合いになるでしょう。私の経験では、多様な大人と交流する方が、生徒の視野が広がり、考えも深まると感じています。保護者や地域住民といった学校外の大人に協力してもらい、生徒一人ひとりとじっくり話す機会が出来ると、取り組みは更に充実するはずです。

なりたい自分像が見えてくれば、日々の学習や進路選択に対する生徒の気持ちも変わってくるはずです。周囲の価値観に左右されるのではなく、自分の価値観によって決められるようになると思います。いわば、自分の人生に対する当事者精神が生まれるのです。たくさんの中学生と語り合う中で、彼らが主体的に判断し、行動するための力を十分に秘めていると、私は確信するようになりました。整える環境次第で、生徒が先生方の期待以上に力を伸ばすこともあるのではないでしょうか。

ハタモク代表
與良昌浩　よら・まさひろ
株式会社もくてき代表取締役。伊藤忠商事、アクセンチュア、ユーエスエスなどを経て、現職。

生徒の心に火をつける

仲間と共に考え、決断する場や機会を提供する

株式会社　川崎フロンターレ　**川口良輔**さん

◎対話を通して、子ども自ら考え、判断させる

株式会社　川崎フロンターレの育成・普及部では、地域の小・中学校の体育の授業でサッカーを教えるスポーツ教室から、中学校の部活動のサポート、Jリーグで活躍する選手を養成するクラブチームの運営まで、幅広い活動を行っています。かかわる子どもたちの競技能力はもちろん、サッカーに対する意欲もさまざまです。

しかし、指導を行う上でのコンセプトは、どの子どもにも共通しています。それは、子どもが自ら進んで取り組める環境をつくり、子どもの自信とやる気を高めることです。自分で考え、行動し、良い決断の出来る選手を育てることは、一瞬の判断が重要になるサッカーでは不可欠だからです。また、主体的に行動できる姿勢は、社会に出てからも必要です。

そのために指導陣が心掛けているのは、トップダウン型で一斉指導をするのではなく、「コーチはこう思うけど、きみはどう考える？」と、子どもたちとの対話を大切にすることです。

◎大切なのは、双方向性、個別対応、継続性

以前、私もトップダウン型の指導をしていた時期がありました。しかし、厳しく指導すればするほど、子どもがこちらの意図とは違う方向に行ってしまうのです。追い詰められた私は、一斉指導をやめ、子ども一人ひとりの現状をじっくり観察しました。

そして、迎えたクラブチームの中学1年生の合宿。通常は起床や就寝時間、食事のことなど厳しく言いますが、そうした指導は行わず、全て子どもに決めさせました。小学校時代、トップクラスで活躍した選手も参加していましたが、指導を行わないと先陣を切って深夜まで遊んだり、インスタントラーメンを食べたりしていました。「今まで厳しく言ってきたことの意味が全く伝わっていない」と愕然としましたが、睡眠不足で体調を崩す子どもが出てきても、あえて何も言いませんでした。

最終日の試合では、出場メンバーに「よく寝て、よく食べていた選手」を選び、戦術を駆使して7対0で大勝させました。試合後、「この試合は競技力ではなく、合宿中によく寝て、よく食べた選手を選んだ。きみたちも競技力は十分あると思うが、きちんと寝て食べていないから、体調が良くないよね。寝る、食べることは大切なこと。合宿から帰ったらどうすればいいかな？」と問い掛けました。先陣を切って夜中まで遊んでいた子どもはその後、レギュラーになれない時期もありましたが、地道に努力し、高校最後の選手権では華々しい活躍をしました。

こんなこともありました。中学生チームに、他の選手がミスをすると「やめてしまえ」など乱暴な口をきく自分勝手な選手Aがいました。そのうち、他の選手との関係が悪化しましたが、私はしばらく何も言わず、それぞれがどのような不満を抱いているのかを観察しました。そして、A選手が無視をされたりパスをもらえなかったりと不利な立場に立ったタイミングで、A選手に「今の状況をどう思う？」と聞いたのです。すると、A選手は「無視されてもやめないよ。僕は大丈夫」と言いました。この強いマインドは、スポーツ選手には必要な要素です。

次に、選手全員を集め、「A選手の言葉を聞いてコーチはすごいと思った。でも、どんな選手でも弱みはある。みんなの気持ちも分かるけれど、A選手の良いところも見てほしい。時間は限られているのだから、お互いの良いところを伸ばした方がいいと思うけど、どうかな？」と問い掛けました。一方、A選手には「きみのマインドは素晴らしいよ。でも、乱暴な言葉は良くない。きみが今のままでいいと思うのなら、自分で決めてそうしなさい。でも、相手を思いやる気持ちはチームプレーでは大事だよ」と言いました。その後、A選手はサッカーの強豪校に進学し、キャプテンを務め、今は大学生になり、高い社会性も身に付けた大人になりました。個人レベルだけでなくチームで話し合い、互いの良さを生かすような結論を導き出させる練習の場を与えることも、大切なのだと実感しました。

子どもは、体験を通して多くを学びます。トライ&エラーを繰り返し、自分で考える機会をたくさん与えることが成長には欠かせません。大人の役割は、うそをついたり、話を大げさにしたりせず、誠実に子どもと向き合って信頼関係を築くこと。そして、問い掛けやアドバイスを通じて、子どもが自ら考え、決断できるように導くことなのだと思います。

株式会社　川崎フロンターレ
川口良輔　かわぐち・りょうすけ
育成・普及部、育成・スクールグループ長。スクールコーチや、U-15監督、スカウトなどを経て現職。

インタビュー

段階を踏みながら生徒を自発的な学びに向かわせる

上越教育大教授　中山勘次郎

言われたことには取り組むが、自ら課題を見付けて動く生徒が少ないと聞く。そのような中で、教師は生徒を自発的な学びへと向かわせるために、どのような働き掛けをしていけばよいのだろうか。学習への動機づけ論を研究テーマとする上越教育大の中山勘次郎教授に話を聞いた。

多様な段階の生徒が同じ学年の中に存在している

先生方にとって「教師の側から働き掛けなくても、主体的に学ぶ生徒」を育てることは、究極の目標だと思います。内発的動機づけ（自ら物事に取り組む意欲のこと）理論の第一人者であるエドワード・L・デシ氏は、人が学びに対する主体性を獲得するまでの段階を図のように整理しています。

まず、行動が生起しない段階（無意欲・無関心）から、先生に言われるから仕方なく学習したり（外的調整）、義務感や先生の期待に応えるために学習するようになります（取り入れ調整）。やがて学びの重要性や必要性を自分でも認識しはじめ（同一化調整）、更には学びに関して自分なりの価値観を形成して（統合化調整）学習に取り組むようになります。最終的には自ら学ぶことに喜びを感じて主体的に学びに向かうようになる（内発的動機づけ）というのがデシの理論です。

このデシの理論を意識しながら生徒の様子を見てみると、同じ学年でも、外的調整段階にとどまっている生徒や、同一化調整段階に達している生徒など、さまざまな段階の生徒がいることに気付くはずです。教師の役割は、個々の生徒がどの段階にいるかをつかみ、生徒が次の段階にスムーズに移行できるように、働き掛けをすることにあるといえます。生徒の成長段階を一律に捉えるのではなく、個別に対応することが大切です。

なかやま・かんじろう◎筑波大大学院博士課程心理学研究科単位修得退学。専攻は学習心理学（動機づけ論）。児童の学習への動機づけに対する社会的文脈の影響性が研究テーマ。著書に『児童の動機づけ志向性と社会的場面における達成行動』（風間書房）など。

多様な段階の生徒がいる中で、先生方の一番の悩みは、そもそも学習に参加しようとし

生徒の心に火をつける

ない生徒（無意欲・無関心の段階）の存在でしょう。彼らは「言われたから仕方なく勉強する」ことさえしようとしません。

私は彼らが学びに無意欲である理由の1つに、「経験と自信の不足」があると考えています。学習に対して意欲的な態度を示す生徒は、過去に失敗や挫折をしたことがあっても、それを乗り越えた経験を持っています。ですから、少々高いハードルを課されても、「きっとまた自分は乗り越えられるはずだ」という自信を持って学びに取り組むことが出来ます。ところが、課題を乗り越えた経験がない生徒は、自分の能力より高い課題を前にした時には不安しかありません。だから、彼らは学びから逃げようとするのです。

鍵を握るのは、彼らに自信と経験を積ませることだと思います。その時には「まだ出来ていないこと」ではなく、「頑張れば今の力でも出来ること」を目標に据えるのが大切です。例えば、30分間集中して授業を受けるのが精一杯の生徒なら、「30分間集中すること」を目標に設定する。そして、頑張って成功できた体験を積み重ねると同時に、どんな行動が有効だったのかをしっかり意識させることで、学びへの拒否反応を軽減し、徐々に学習に参加する態勢を整えていくのです。

図　内発的／外発的動機づけの段階モデル

＊ Ryan,1995,Ryan&Deci,2000 を基に中山教授が改変

学ぶことの意義や面白さを生徒たちに伝えられるか

多くの生徒は、外的調整や取り入れ調整の段階にあり、教師から言われないと学習しようとしないのが現状だと思います。そうした中でも、工夫次第で生徒の自発性を引き出していくことは可能だと思います。

例えば、国語の授業で、漢字の小テストをポイント制にした先生がいます。テストの点数だけではなく、準備学習や出来なかった漢字を復習した時間もポイントとして加算し、テストの点数が低かった場合でもしっかり復習をすれば100点を取った場合と同じポイントを与える仕組みにしました。

「ポイント制で刺激を与えることで生徒を学習に向かわせる」といった方法は、一般には刺激を与えるのを止めてしまうと同時に生徒はやる気を失うので、学習が継続しないといわれています。しかし、この先生は、準備学習と復習に高い配点ポイントを設定することで、「学習はテストの結果が良ければそれでいいのではなく、準備学習と見直しが大事なんだよ」というメッセージをポイント制の中に込めようとしました。メッセージを受け取った生徒の中には、学習で何が大切なのかを体得し、学びに対する姿勢が変わる生徒が出てくることが期待できます。

「義務感や周囲の期待に応えたい」という意識の生徒をもう一段上の段階に引っ張り上げていくには、先生がその教科を学ぶことの意義や面白さを、どのように生徒に伝えていくかも重要になります。中学校では学ぶ内容の抽象度が高まるため、生徒は「こんな学習をして、いったい何の意味があるのだろう」という疑問を抱きがちです。そうした生徒の疑問に対して、「これを学ぶと、生活のこんな場面に役立つんだ」「モノの見方がこう広がるよ」などと、生徒に向けて説得力のある言葉で語ること。教師にそれが出来るかどうかが、生徒を自発的な学びに向かわせるために非常に重要なことだと思います。

小中の綿密な連携で育む英語コミュニケーション能力

岐阜県多治見市立笠原中学校

これからの社会では、コミュニケーション能力育成がより重視される中、中学校の英語教育はどうあるべきなのか。今号は、10年前から小中が連携し、児童・生徒が聞く・話す必然性を感じさせる活動を取り入れながら英語教育を行ってきた学校事例を通して考える。

「Hello, everyone. Today's program is Kasahara Quiz Show! Are you ready?」

多治見市立笠原中学校1年C組の英語の授業は、木股純子先生の元気なあいさつで始まった。今日の課題はグループ対抗の学校に関するクイズ大会だ。チーム・ティーチングで入っていた松田洋和先生が、活動では eye-contact, gesture, reaction などが大切だと伝えた後、生徒はいっせいに動き出し、あちこちで英語が飛び交い始めた。

「How many twins in Kasa-chu?」と数を問うもの、「Do you know Mbika?」と学校活動の名称の意味を問うもの、校章の写真を示して「Where is this?」と尋ねるものなど、工夫を凝らしたクイズが並ぶ。回答者が正解に驚いたり、その表情に出題者が得意げな顔を見せたりして盛り上がる。活動の中盤、ALTが checking も大切と「OK?」「Do you understand?」などを紹介すると、さっそく使う生徒もいた。

最後の振り返りでは「Aくんが前よりも大きな声でクイズを出していました」など友だちの良かった点を発表する生徒もいて、皆、満足そうな表情で授業は終わった。

School Data

多治見市立笠原中学校

◎1947（昭和22）年開校。文部科学省の研究開発学校の指定を受け、笠原小学校と共に小中連携の外国語活動・教育の研究に取り組む。

校長 柴田哲也先生／**生徒数** 296人／**学級数** 10学級／**所在地** 〒507-0901 岐阜県多治見市笠原町2455-12／**TEL** 0572-43-4165

URL http://school.city.tajimi.lg.jp/j-kasahr/

コミュニケーションの喜びを感じられる授業

笠原町では一小一中という環境を生かし、2003年度に文部科学省「研究開発学校」の指定を受けて以降、小中連携の英語教育に取り組んできた。現在は幼稚園・保育所とも連携し、幼保は週1時間、小学1・2年生は週1時間、小学3～6年生は週2時間、中学生は週4時間、外国語活動または英語の授業を行っている。指導の軸は「笠原型コンテント・ベイスト」。他の教科や領域の既習内容を生かした素材を取り入れ、課題解決的な活動を行う。聞く・話す・（中学校では）読む・書く場面を必然的に生み出すと共に、活動の過程で驚きや発見があることによって、子どもがコミュニケーションの喜びを感じられるような授業づくりを心掛けている。

冒頭の「Kasahara Quiz Show」を例に説明しよう。これは、1年生の授業で、全23時間の13～18時間に当たり、単元目標は「学校紹介のビデオレターが制作できる」だ。同校では毎年11月に中部大の留学生を

Teachers

多治見市立笠原中学校
松田洋和
まつだ・ひろかず　2学年担任。英語科。「相手の気持ちを大切にする、心豊かな日本人を育てたい」

多治見市立笠原中学校
木股純子
きまた・じゅんこ　1学年副担任。英語科。小学校を兼務、6年生の外国語活動を担当。「人とかかわる大切さを感じられる学級づくり、授業づくりを心掛けている」

招いた国際交流を行っているが、留学生の参加者が年々減っているという課題があった。木股先生は、単元の最初の授業でその問題を提起。生徒が話し合った結果、ビデオレターで学校をアピールしようと意見がまとまった。その前段として、学校の良い点を探すためにグループ対抗のクイズ大会を行った。

「生徒は自分たちが見付けた良い点をなんとかクイズにしようと一生懸命です。ですから、単元に含まれていない単語や文法でも、生徒が使いたいと思ったタイミングを逃さずに、言語材料を与えることを大切にしています。必要な時に必要な言葉を与えると、生徒はすーっと吸収していきます」（木股先生）

2学年担当の松田先生もこう話す。

「2年生で行ったロボット開発をテーマにした授業では、社長役のALTへのプレゼンテーションが目標でした。説得力のある内容にしようとデータなどを盛り込んだレポートを英語で作成しました。多くの生徒が苦手とする書く活動でも、必然性を感じると真剣に取り組みます」

写真　クイズ大会は6グループの対抗戦。クイズを記したボードには写真やイラストも多用し、分かりやすく表現。生徒は、出題者や回答者が1人に固定しないよう、互いに発言を促していた

小学校での活動を知識として定着させる

生徒の英語活動が活発なのは、小中連携の影響も大きい。実は、木股先生は12年度までの3年間、笠原小学校に勤務していた。つまり、今の中1生を小6で指導し、生徒と共に中学校に異動してきた。松田先生は、木股先生の授業についてこう話す。

「今年の1年生は、昨年の1年生以上に英語活動に積極的です。木股先生が生徒の学習歴や意識を理解し、それらを大切にした授業づくりをしているからこそ、あれだけ生徒が意欲的なのだと思います。中学校側が小学校での指導を大切にすることが重要なのだと改めて感じています」

小中はこれまでも英語教育交流会（2カ月に1回）などで情報を共有してきた。それを一歩進めて、12年度から小中の兼任教師を1人置き、小学校での指導をいかに中学校に引き継ぐかも研究している。

「単元計画では、小学校での既習事項をいかに生かして定着させるかを意識しています。授業では、小学校での外国語活動を引き合いに出し、『あの時に出てきた言葉だよね』などと言って生徒に思い出させ、系統立てて説明し、体験が知識として定着するように指導しています」（木股先生）

「am, are, is は別々なものだと思っていたが、be動詞という1つの仲間だと分かってすっきりした」と振り返りシートに書いた生徒がいた。小学校で英語に十分親しんでいる分、中学校では適切なタイミングで既習事項を整理し、体系的に理解できるよう指導することが重要だと、同校は考える。

「生徒は、自分の考えを英語で発信する活動を小学1年生から積み重ねてきています。そうした中で、伝え合う、理解し合うという相互関係が築かれ、話す態度や聞く態度がきちんと身に付いています。そうした生徒の姿を見ていると、英語の素地を養っておくというのは、こういうことなのだと実感します」と、木股先生は話す。

笠原町は外国人が多い地域ではなく、街で外国人と会うことはほとんどない。ALTも1人なので、授業中に生徒全員と話せるわけではない。それでも生徒はジェスチャーを交えながらクイズを出し、表情豊かに英語で答える。国際交流の日に大勢の留学生が来てくれるよう願ってビデオレターをつくる――。コミュニケーション手段としての英語を指導する1つの方向性を同校の取り組みが示唆している。

ミドルリーダーの挑戦
——前へ！前へ!!

皆で授業を改善していく文化を私を育ててくれたこの地に根付かせたい

佐賀県吉野ヶ里町立三田川中学校 **吉田喜美子** 51歳

Middle Leader

よしだ・きみこ◎教職歴29年。鳥栖市立田代中学校などに勤務後、同校に赴任して3年目。担当教科は英語科。佐賀県の「スーパーティーチャー」として活躍。同校は2009年度から3年間、三田川小学校と外国語活動・教育に関する小中連携の研究開発学校の指定を受けた。

これまで私が歩いてきた道のり

「3年間は我慢しなさい」「勉強を続けなさい」背中を押した校長の言葉

教師になって最初の7年間、私は自分の出身中学校に勤めました。先輩の先生方は親身に教えてくださいましたが、授業もクラス経営もなかなかうまくいかず、何度も教師を辞めようと思いました。

隣のクラスでは授業が盛り上がっているのに、私が授業を行うクラスではしんと静まりかえっていて、生徒たちはちっとも楽しそうには見えません。ああ、自分は教師に向いていないのだと情けない顔をしている私に、当時の校長は真顔で、「今、辞めてはいけません。3年間はしっかり勉強しなさい」とおっしゃったほどです。

2年目に、私は校長に連れられて、県中英研の会議に参加しました。学校にも尊敬できる先輩の先生がたくさんいましたが、学校の外には更にすごい先生が大勢おられ、生徒のために自主的に勉強されていることを知りました。だったら、経験のない私などはもっと勉強しなければいけない——そう実感しました。

実際、私は研修などさまざまな学びのチャンスをいただいたと思います。もちろん、勉強したからといっても、すぐに自分の授業がうまくいったわけではありません。相変わらず失敗も多く、「やっぱり私は教師に向いていない」と思うこともしばしばでした。でも、落ち込んでいる時に限って、生徒が「先生、今日の授業は楽しかった！」「良く分かったよ！」などと声を掛けてくれるんです。何度も生徒に救われたと思います。だからこそ、生徒に甘えられない、もっと上手に授業が出来るようになりたいと悩みました。本当に、教師としての私の成長はとても時間が掛かったと思います。

教師としての自分のあり方が見えてきたのは、2校目で数年が経ってからだと思います。とはいえ「もう大丈夫」と言えるような自信はありませんでしたから、先輩に質問し、本を読み、授業参観をさせていただき、校外の勉強会に足を運びました。そんな私に、校長は「子どもたちのためになると信じるなら、何でも積極的に取り組みなさい。そして、自分自身も勉強をし続けなさい」と言ってくださいました。それは、初任校時の校長先生の言葉と共に、今も常に私を支え、よりどころとなる言葉となりました。

今、私が踏み出そうとしている新たな一歩

教師が一緒に努力し、達成感を味わえる文化を佐賀県に根付かせたい

私は今もいろいろな先生の授業を見学しますが、「この先生の授業はすごい！」と感動することがたくさんあります。学級通信1つをとっても、「どうしたらこんなに楽しく作れるのか、ぜひ教えてほしい！」と思うほど、先生はそれぞれ得意分野をお持ちです。自分を向上させようと思ったら、勉強できることがまだまだたくさんあると思っています。

勉強して得たものを、教室に持ち帰って試してみると、生徒の反応が明らかに変わり、「先生、分かった！」「言えたよ！　書けたよ！」と言ってくれる瞬間があります。その時の生徒の笑顔は、教師としての自分の勉強のエネルギーになります。

私が他の先生方と一緒に、勉強していくことの大切さに気が付いたのは、現場を離れて県の教育センターに勤務していた2005年度、「辞書指導ワークショップ」の県内開催に携わったことがきっかけです。生徒の主体的な家庭学習を促進させることを主な目的に、英和・和英辞書の効果的な活用法を生徒に身に付けさせる指導を、東京などから著名な先生方を招いて皆で学んだのです。

参加者からは「皆で勉強することがこんなに楽しいとは！」「うれしくて泣けてしまった研修は初めてです」といった言葉をたくさん聞くことができ、私も同じ目標を持って一緒に努力することの楽しさと達成感を味わいました。

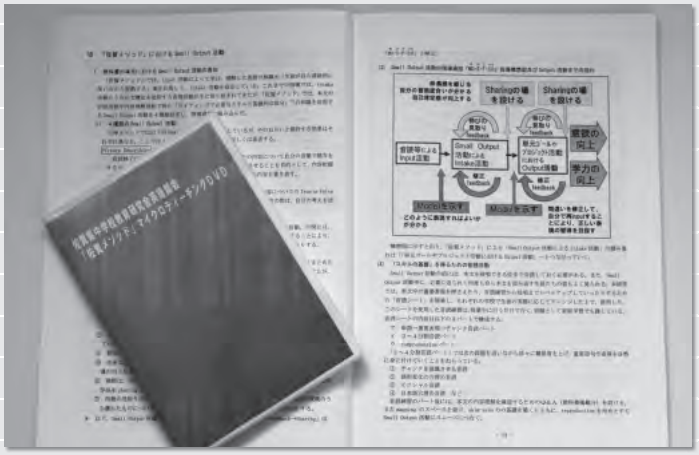
教師にとって、1人で黙々と勉強することは大切です。しかし、皆で一緒に勉強する時、そこにはエネルギーが1つにまとまっていく感動があります。また、実は皆、同じようなことに悩み、同じようなことを知りたかったということも分かります。だからこそ今、私は「皆で学んでいく文化」を大切にしたいと強く思っています。

06年度から毎年、吉野ヶ里町の協力を得て公共施設を借用し、英語指導に関する学習会を実施しています。講師は全国からさまざまな方をお招きし、参加者も中学校や高校の先生のみならず、塾の先生、大学の先生や外国人講師、大学生と幅広くいます。自主的な会ですから、当日、机を並べたり、弁当の準備をしたりするのも、県東部地区にある中学校の英語の先生方が率先し、皆で協力して行います。そうして、皆の力が1つになっていく感動と、学んだことを実践し、たくさんの生徒が笑顔になる感動を味わっています。

皆で同じ方を向き、一緒に楽しく学べる文化を、これからも佐賀県に根付かせていきたいですね。誰か1人が引っ張り上げるのではなく、皆で考え、全国に誇れる佐賀県の授業をつくり上げていく。それはきっと、これまで私が学んだ多くの先輩方への恩返しになるはずだと思います。

吉田先生たちの取り組み　『佐賀メソッド』

◎吉田先生がアドバイザーを務める佐賀県中学校教育研究会英語部会では「自ら発信する力・人とかかわり合う力を育てる」を目標に、①質問・応答する力、②説明する力、③要約する力、④コメントする力に焦点化した『佐賀メソッド』を研究している。全県的に英語の学習意欲が高まり、「書くこと」へのハードルが下がるなどの成果が見られ、全国から注目を集めている。



『佐賀メソッド』の2012年度の研究発表紀要。Small Output 活動を軸とした Backward Design によるプロジェクト型学習がテーマだった

読者のページ
Reader's VIEW

2013 Vol.1特集「主体的に取り組む言語活動の工夫」へのご意見

このコーナーでは、編集部に寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

＊『VIEW21』中学版のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト（http://berd.benesse.jp）でご覧いただけます。

◎特集の「主体的に取り組む言語活動の工夫」は、まさに本校でも課題にしている内容であり、大変参考になりました。誌面では、単なる話し方や聞き方の指導が論じられているのではなく、その根底にある「問い」が生徒にとって大切であること、言語活動をしたくなる、あるいは必要となる文脈とすることなど、必然性とリアリティーを持って記述されていて、共感する部分が多かったです。［岐阜県／K中学校］

◎横浜国立大・髙木展郎教授のインタビュー、佐賀県小城（おぎ）市立三日月中学校での取り組みは、生徒の「分からない」という意識を授業後に「分かった」に変えるための取り組みとして、「リアルな問い」＝「知的な意欲を揺さぶる発問」がいかに大切であるかが具体的に述べられていました。非常に参考になりました。［岡山県／F中学校］

◎小城市立三日月中学校の「単元を貫く『リアルな問い』で学びの楽しさや価値に気付かせる」という事例には、気付かされることが多くありました。世の中にある事物のうち、生徒が興味を持てるようなものを単元に盛り込んで問いとするという手法は、いろいろなことに応用できると思います。［東京都／D中学校］

◎「言語活動をどう授業の中で組み込み成果を積み上げていくか」という点で、大阪府高槻市立冠中学校の実践は大いに参考になりました。「まなびのプラン」「まなびのステップ」は、生徒たちにとってイメージしやすく、しかも授業のポイントがつかめるものだと思います。教える側にとっても、これをしっかり押さえることによって、授業づくりがしやすくなります。使いこなすまでじっくりと練り上げてみたい事例であり、すぐに自校に取り入れたいと思います。［鹿児島県／T中学校］

◎「これからの教育」の東京都渋谷区立松濤（しょうとう）中学校は、ＡＬＴ４人を配置するなど、小規模校の持ち味を生かした実践に、マンパワーの部分では本校とギャップを感じましたが、英語の授業だけでなく、実技４科目の授業、修学旅行での他団体との連携と、一貫してコミュニケーションのための英語を使う場を設けていることに敬服いたしました。知恵と工夫次第で、いろいろな特色を出せると勇気をいただきました。［長野県／I中学校］

読者モニター募集のご案内

『VIEW21』中学版では、企画や誌面づくりのFAXアンケートにご協力いただける先生を募集しています。今年度中学校にご勤務されている先生に、年5回程度のFAXアンケートをお願いする予定です。次回からのご回答謝礼として、1回につき500円の図書カードと本誌1冊を、中学校のご住所宛てに送付・進呈いたします。ぜひご応募ください。

◎**応募方法**〈締め切り：8月30日（金）受信分まで〉
下記の❶～❺をA4用紙1枚（書式自由）にご記入の上、FAX **0120-959-887**（送信料無料）にお送りください。
❶ご勤務先の中学校の郵便番号、住所　❷学校名　❸お名前　❹役職［1：校長　2：副校長　3：教頭　4：教務主任　5：学年主任　6：研究主任　7：生徒指導主事　8：進路指導主事　9：一般教諭（担任あり）　10：一般教諭（専科）　11：その他］　❺担任の場合の学年
＊2013年11月中旬予定のアンケートの発送をもって結果のお知らせといたします。
（応募多数につき、お願いが出来ない場合は9月下旬頃に封書にてご連絡いたします）

子どもは未来

ベネッセ教育総合研究所は、
子どもたちの成長に寄り添う研究と
社会への発信を通して、
一人ひとりが学びに向かい、
今と未来を“よく生きる”ことに
貢献することを目指しています。

ベネッセ教育総合研究所

編集後記

今号より「ベネッセ教育総合研究所」から『VIEW21』を発刊する運びとなりました。今まで同様、学校現場が抱える切実な課題に向き合い、先生方とともに解決策を考えていくという編集方針は変えません。それに加えて、これからの社会を中学生が生き抜いていくために、どのような力や姿勢が必要なのかを探り、発信をしてまいります。今後ともご指導のほどよろしくお願いします。

ベネッセ教育総合研究所 情報編集室室長　小泉和義

VIEW21 中学版 2013 Vol.2　2013年8月14日発行／通巻第318号

発行人　岡田晴奈
編集人　谷山和成
発行所　（株）ベネッセコーポレーション
ベネッセ教育総合研究所
印刷製本　凸版印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　中丸満、長谷川敦
撮影協力　荒川潤、川上一生、松原誠、南弘幸
イラスト協力　カモ、幸剛

◎お問い合わせ先
情報編集室
〒206-8686
東京都多摩市落合1-34
電話　042-311-3390

©Benesse Corporation 2013

色とりどりの学びの情景

地域と絆を結ぶ防災教育

表紙の学校　香川県まんのう町立満濃中学校

町職員の避難所の機能説明後、生徒からは「何人収容できるのか」「避難所で病人が出たらどうすればよいのか」などの質問が出された

停電時のための自家発電装置と専用の燃料タンク、プールの水を飲料に浄化できる装置が学校にあることに驚く生徒たち

まんのう町が主催した「防災ボランティア養成講習会」に生徒の有志が参加

炊き出しや応急手当の仕方を、地域の人たちと共に日本赤十字社の講師から学んだ

2013年４月に完成したまんのう町立満濃中学校の新校舎は、地域の避難所としての機能を併せ持つ。この日は町職員と県の防災士が来校し、各クラス代表２人と生徒会役員の計30人が参加して、避難所設備の見学が行われた。非常食の備蓄庫や下水道に直結して設置できる簡易トイレなどの説明に、熱心にメモを取る生徒たち。質疑応答では、設備の質問以外に「中学生が役に立てることは何か」と尋ねる生徒もいた。「避難所には高齢者や小さな子どもも来る。きみたちが被災者であっても、周りと声を掛け合い手助けをすることが大切」という防災士の言葉に生徒は深くうなずく。

地域の人に必要とされていると感じることが、いざという時にも共助の行動につながる。生徒たちは地域のお祭りやボランティア活動の呼び掛けに、積極的に参加するようになった。新校舎による新たな船出は、地域との絆を深める心も育てていく。

過去1年間の特集テーマ
Back Number

2013	Vol.1 主体的に取り組む言語活動の工夫
2012	Vol.4 中学1年生の良さを伸ばす
	Vol.3「自律的な学習者」を育てる学び方指導
	Vol.2 主体的な進路選択 ―自らの意思と責任で決める力を育てる

すべての記事をウェブサイトからPDFでダウンロードいただけます

http://berd.benesse.jp　または　ベネッセ　研究　で　検索

次号 Vol.3 は 11 月上旬発行（予定）です

2013年8月14日発行／通巻第318号
発行人 岡田晴奈　編集人 谷山和成　発行所 ㈱ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

©Benesse Corporation 2013